

又同外務大臣ハ露佛獨三國ニシテ、果シテ如何ナル程度マデ其異議ヲ主張スル意向ナルヤヲ知ラズト雖モ、形勢頗ル容易ナラザル有様ナルガ故ニ、日本ハ之ニ對シ十二分ノ覺悟アル方得策ナラン。又英國ハ平和ヲ望ムヲ以テ、日本ガ歐洲諸國ト干戈ヲ交ユルヲ好マザルハ勿論、日清戰爭ヲシテ繼續セシムルコトヲモ欲セザルナリ。故ニ英國ハ目下ノ困難ヲ解融スルノ機會ヲ失ハザランコトヲ務ムベシ。英國ハ、日本ニ對シ友情ヲ抱ケドモ、同時ニ露佛獨三國トモ友邦ノ關係ヲ有スルガ故ニ、英國ハ此際ニ處スルニ當リ、彼是酌量ノ上、其威嚴ト決斷ト責任トヲ以テ運動スルノ必要アル旨ヲ申述ベタリ。

本使ハ兼ネテ在伊高平公使ヨリノ通知ニ由リ、伊國政府ノ執ラントシツ、アル方針ヲ知り居ルヲ以テ、英國外務大臣ニ向テ此際當事件ヲ終了スルノ好案アリヤト問ヒタレドモ、同大臣ハ否ト答ヘ、再ビ前述ノ言ヲ繰返シ、英國政府ハ恬目シテ當事件ノ成行ニ注意スベキ旨ヲ述ベタリ。尙同大臣ノ決答ヲ得次第更ニ電報スベシ。

四月二十七日發

陸奧外務大臣

在伊 高平公使

伊國外務大臣曰ク、歐洲交渉政略上ニ於テ、英國ノ意嚮一定セザルハ、今回獨逸ヲシテ干涉ヲ企テシメタル原因ノ一ナリ。故ニ「ローズベリー」伯ノ優柔不斷ノ内閣ヲシテ、容易ニ日本國ト共ニ働ク様ニ誘導スルコト能ハザレバ、英國ヲシテ働カシムル爲ニハ、獨逸國ノ底意ノ在ルトコロヲ告グルコト可ナルベシ。此事ハ伊太利ニ於テ獨逸ノ歡心ヲ失ハズシテ能ク之ヲ爲シ得ベシ。且ツ若シ必要ナレバ伊國ハ其軍艦ヲ東洋ヘ派遣スベシ。

四月二十七日露京發

舞子 陸奧外務大臣

在伊 高平公使

本使ハ今朝伊國外務大臣不在ナリシヲ以テ、同外務次官ニ面會シ、伊國政府ヨリ在英、在米伊國大使ヘ今回ノ事件ニ關シ、伊國政府ノ執ルベキ方針及ビ昨日伊國外務大臣ト本使トノ談話ノ模様ヲ電報シ。且同兩大使ヲ經テ、英米兩國政府ヘモ其旨通知セラレンコトヲ請求シ置キタリ。

四月廿七日午前十二時五分露京發

陸奧外務大臣

在伊 高平公使

講和條件ニ對スル獨逸ノ意向ニ關シ、本使ハ伊國外務大臣ト長時間ニ互ルノ會見ヲナシタリ。其節同大臣ハ密ニ本使ニ告グルニ左ノコトヲ以テセリ。獨國ハ伊國ノ協同ヲ望ミタレドモ、伊國ハ之ヲ拒絕シタリ。今回獨逸ヲシテ動カシメタル底意ハ、全ク之レニ由リテ歐洲大陸ノ政略上ニ於ケル佛露同盟ヲ斷チ、遂ニ佛國ヲシテ孤立ノ地位ニ立タシメントスルニアリ。然レドモ獨逸ヲシテ露國ト合同シテ、餘リ威力ヲ逞フセシムルハ許スベカラズ、或ル程度ニ於テ其勢力ヲ遏止セザルベカラザルナリ。斯ル事情ナルガ故ニ、若シ英伊米ノ三國ヲシテ結合セシメ、日本ノ味方タラシムルヲ得ルニ於テハ、干涉問題モ由々敷大事ニ至ラズシテ濟ムヲ得ベシ。然レドモ若シ之ヲナサントセバ、日本ハ先ヅ此三國ノ協同ヲ請求セザルベカラズ。其上ニ於テハ伊國ハ悅ンデ英米兩國ヲ誘引スベシ。元來今回ノ事件ハ頗ル狂言的ナルガユヘニ、獨國ト伊國ハ毫モ三國同盟ト抵觸セズシテ反對ノ地位ニ立ツヲ得ルナリ。

又伊國外務大臣ハ此事件ヲ結了スベキ日本政府ノ方策、及自今新聞紙ノ報告スル所ノ獨佛露三國ヨリ公然日本政府へ提出シタル事柄ノ詳細ヲ知り得タシトノコトナリ。

四月二十七日露京發

舞子 陸奧外務大臣

在露 西公使

四月二十五日附貴電ニ基キ、本使ハ力ヲ盡シテ露國政府ヨリ提出ノ勸告ニ關スル我請求ニ對シ、都合ヨキ同政府ノ回答ヲ得ン事ヲ努メタリ、四月二十六日、本使ハ露國外務大臣ト長時間談論ニ及ビタルニ、同大臣ハ大ニ感ズル所アルガ如キ色アリ。而シテ再ビ露國皇帝陛下ノ叡慮ヲ伺フベキコトヲ約セリ。然ルニ今日ニ至リ、同大臣ハ露國皇帝陛下ニハ、露國ノ勸告ヲ翻回スベキ充分ノ理由ナシトノ故ヲ以テ、我政府ノ請求ヲ承諾シ玉ハズトノ旨ヲ本使ニ回答シタリ。本使ハ露國ヨリ提出シタル抗議ノ程度ヲ確知シ能ハザレドモ、目下露國政府ハ運送船ヲ遣リ「オデサ」ニ於テ軍隊派出ノ準備中ナリトノ風聞アリ。故ニ豫メ露國ノ干涉ハ重大ナルベシト覺悟シ居ル方安全ナラン。

四月二十八日午前八時發

鍋 島

外務大臣

總理大臣へ

昨夜ノ高平ノ電報ニ依レバ、歐洲各國ノ議論モ遂ニ一致セザルガ如シ。今一步ヲ進メバ獨逸ハ或ハ露ト分カル、ヤモ知レズ。今日ハ西及加藤ノ回答モアルベシ。其上ニテ我レノ決心ヲ定ムルコトヲ得ベシ。此形勢ニ付テハ間際迄押行キ、愈々已ムヲ得ザルノ場合ニ及デ一轉スルノ手段ヲ取ルヲ得策ト思フ。本大臣ノ病氣モ昨今大ニ快キ方ナレバ、指揮次第何時ニテモ上京スルコトヲ得ベシ。

四月二十八日午前十時二十五分發

鍋 島

外務大臣

總理大臣へ

昨夜ノ青木ノ電報ニ對シテハ、英米兩國駐在ノ我公使ニハ、既ニ夫レト訓令シ置キタル故心配スルニ及バズ。貴官ハ傍目ヲ觸ラズ單ニ獨逸ノ形勢ニ注目セヨト電訓シ置キタリ。又高平公使ニハ伊國政府ヲ我ガ味方ニスル様盡力スベク、且ツ伊國外務大臣ガ内話シタル事情ヲ青木加藤栗野曾禰ニ通ゼヨト訓令シ、西ニハ高平ノ電信ヲ内見セヨト云ヒ遣シ置キタリ。

四月二十八日午前十時四十五分發

鍋 島

外務大臣

總理大臣へ

昨日伊東書記官長ヨリ、閣下ノ命ナリトテ西源四郎ヲ同伴シタシトノコトナレドモ、外務省無人ノ折柄ト云ヒ、且ツ同人ハ英語ヲ解セズ、此度ノ用向キニハ格別用立タザル故、見合ハスベシト申遣シ置キタルニ、同人ハ佛語ヲ解スルモノ入用ナル故、是非共同行シタシト申越シタリ。何故ニ佛語ヲ解スルモノ入用ナルヤハ本大臣ニ於テ了解セズ。兎モ角モ閣下ノ御思召ニテ

機密電報綴込

是非西ヲ同行セシメタル方宜シトノコトナルヤ。實ハ本野ヲ呼ビ返シタルニ依リ或ヒハ外務省
參事官ト云フ名ニテ、西ヲ佐世保ニ遣ラネバナラヌコト起ルヤモ知レザレバ、京都ニテ御手元
ニ御使ヒニナルハ格別ナレドモ、海外派出ハ可成見合セタシ。

四月二十八日午前十一時三十分發

鍋 島

外務大臣

總理大臣へ

高平ノ五十號電信ニ對シテハ「貴官ハ伊國外務大臣ニ面會シ、英國ノ決心ヲ促スコトニ盡力
セラレタシト依頼スベシ」ト訓令シ置キタリ。

四月二十八日午後十二時五十五分發

陸奧外務大臣

林外務次官

露佛獨三公使來省、回答ヲ催促ス。昨日御報シタル如ク答ヘタルニ、皆本國へ申遣スベシト
申セリ。露公使ハ自分ノ意見ニテハ催促ハ未ダ早シト思フト云ヘリ。

四月二十八日午後三時發

鍋 島

外務大臣

總理大臣へ

貴電承知、西及加藤ノ返答ノ模様ニヨリ何時ニテモ上京スベシ。

四月二十八日午後三時三十分發

鍋 島

外務大臣

總理大臣へ

機密電報發込

高平五十一號電信ハ、恰モ本大臣ヨリ同公使ニ對シ今朝發シタル訓令ノ旨趣ヲ實行セシモノナリ。故ニ加藤栗野ニハ高平ノ電報ノ意味ヲ適當ニ利用スベシト訓令シ置キタリ。

四月二十八日 露京發

陸奧外務大臣

在伊 高平公使

本使ノ請求ニ由リ、伊國政府ハ同政府ノ意向及伊國外務大臣ト本使トノ談話ノ模様ヲ在英國及ビ在米國伊國大使ヘ電報シタリ。又在日本伊國公使ヘハ、在日本英米兩公使ト共ニ和合ノ策ヲ講ズベキ旨電訓セリ。

四月二十八日舞子發

在伊 高平公使

陸奧外務大臣

貴電五十號領收ス。閣下ハ伊國外務大臣ニ面會シ、獨逸政府内實ノ意嚮ヲ英國ニ告ゲ、同國ヲシテ日本ニ助力スルコトノ決心ヲナサシムルコト、及ビ清國ヲシテ速カニ條約ノ批准ヲナサシムルコトニ付キ、盡力アランコトヲ同大臣ニ請求セラルベシ。此事ハ内密ニ在英公使ヘ通知セラルベシ。

四月二十八日午後五十分發

伊藤內閣總理大臣

陸奧外務大臣

西公使ノ三十三號電信ニヨレバ、露國政府ハ猶我レニ對シ、多少相談ノ餘地ヲ與ヘ居ル故ニ「アルチメートル」ノ來タルコトアルマジ。何トカ我ヨリ口實ヲ設ケ掛合ヒ居ル内ニ、歐洲ノ形勢一變スルヤモ測ラレズ。本大臣ハ兎ニ角明朝九時神戶發ノ汽車ニテ上京スベキニ付、總テノ御決定ハ夫迄御見合セ下サレタシ。今日露國公使及佛公使ヨリ林次官ヘ忠告シタル模様ニテモ、歐洲各國ノ舉動ハ如何ニ彼等ノ心配シ居ルカヲ見ルベシ。而シテ獨逸公使ガ此忠告ニ加ハリ居ラザリシモ亦奇ナリ。

四月二十八日 露京發

陸奧外務大臣

在露 西 公 使

東洋ニ於ケル露佛同盟艦隊ノ全力ハ、已ニ貴大臣ニ於テ御承知ノコト、信ジ、本使ハ戰端ヲ開クニ至ルノ危険ヲモ省ミズ、彼等ノ提議ヲ排却スルノ、果シテ我國ニ於テ得策ナルヤ否ヤヲ知ルニ苦ムナリ。而シテ之ヲ要スルニ戰捷ノ如何ニヨリテハ、其得失ヲ決スベケレバナリ。然レドモ彼我ノ兵力比較上、貴大臣ニ於テ到底彼ニ抵抗スルコト覺束ナシトノ御決心ナレバ、本使ハ過日既ニ上申シ置キタル如ク、朝鮮ニ接續ノ土地ヲ拋棄シテ、目下ノ議論ヲ結了スルコト、策ノ得タルモノナルベシト思考ス。結局本使ノ意見ハ、此事件ノ平和結了ヲ圖ル爲メ、永遠ノ遼東半島ヲ占有スルヲ罷メ、償金額仕拂ノ擔保トシテ、一時同半島ヲ占領スルコトトシ而シテ大ニ其償金ノ額ヲ増加シ、清國ヲシテ永ク之ヲ皆濟シ得ザラシムル様ニ爲スコト上計ナルベシ。然レドモ目下清國ハ、其勸告ノ日本ニ容レラザルベキヲ恐レ、且佛國ノ其企圖ヲ貫徹シ得ザルヤヲ懸念シ居ル様子アルガ故ニ、或ハ最後ノ場合ニ立至ルマデ、禮ヲ盡シテ彼ノ勸告ヲ拒絕スルモ亦一策ナラン。

四月二十八日午後三時五十五分發

陸奧外務大臣

林 外務次官

先刻露公使ハ左ノ事ヲ申シタリ

勸告一件ニ付日本ハ（イニシエタウ）ヲ取り、却テ面倒ヲ惹起サレヌ様ニ成サレタシ。
 又佛公使モ同様ノ意味ヲ述べ、且此件ニ付外ヨリ種々ノ親切ラシキ事ヲ云フモノアルベケレドモ、浮カト之ニ乗ラレヌ様、篤ト御勸考アリタシト眞實ラシク申シタリ。

昨廿七日露公使宛ニテ本國ヨリ二ページノ電信ニ通來リ居ルナリ。御含迄報告ス。

四月二十九日 倫敦發

京都 陸奧外務大臣

加 藤 公 使

英國外務大臣ハ本日左ノ通り確答ヲ爲シタリ。
 英國政府ハ曩ニ局外中立ヲ守ルコトニ決シタレバ、此度モ同一ノ意向ヲ維持セント欲ス。英國ハ日本國ニ向テ最モ懇篤ナル感情ヲ懷クト同時ニ、己レノ利益ヲモ考ヘザルヲ得ザルニ付、提議ノ讓歩ニ關シ、日本國ヲ助クルコト能ハズ。而シテ該讓歩ハ各國ヲ満足スルニ足ラズ、又露國ハ眞ニ決心スルトコロアルガ如シ。
 本使ハ外務大臣ニ向ヒ、英國政府ハ伊國政府ヨリ何カ通知ヲ得タルヤト問合セタルニ之ニ答ヘテ、特ニ伊國ヨリ通知ヲ受ケザルモ、伊國モ英國ト均シク、日本國ニ對シ友誼ヲ懷キ居ルコトハ承知ナリト言ヘリ。

明治二十八年四月二十九日午前十二時五十五分

華盛頓府發同日午後二時三十分京都着

陸奧外務大臣

栗野公使

華盛頓駐劄伊太利特命全權公使ハ、本國政府ヨリ電信ヲ以テ訓令スル所ヲ米國國務卿ニ示シ、

日清事件ニ關シ合衆國ハ如何ナル運動ヲナスベキヤヲ問ヘルニ、國務卿ハ其閣僚ト協議ノ上米國政府ノ政策タル、列國ト聯合ノ運動ヲナスコトヲ許サル旨ヲ答ヘタリト。國務卿ハ之ヲ本使ニ告ゲタリ。

四月二十九日午十二時五十五分發

陸奧外務大臣

林外務次官

今朝又露佛獨三公使來省、昨日本官ノ爲シタル回答ヲ本國ヘ電報セシガ、之ト入レ違ヒニ本國ヨリ更ニ電報ニ接シタルニ、回答ハ是非和約批准交換前、即チ事ノ(フイトアツコンブライ)ナラザル前ニサレタシト訓令アリタル旨申出タリ。故ニ本官ハ之ニ答ヘテ、昨日午後外務大臣ノ電報ニ因レバ、大臣ハ本日病ヲ押シテ京都ニ赴カレ、此件ニ付最後ノ決議アリ次第、歸京ノ上自身ニ回答ヲサル、積リナル由故ニ、期日前ニハ歸京サルベシト申置キタリ。

四月二十九日發

陸奧外務大臣

西公使

露國ノ勸告ニ對シ、貴大臣ヨリ回答ヲ與ヘラルル爲メノ參考トシテ左ノ事實ニ御注意ヲ請フ。
近頃露國外務大臣ト長時間面談ノ節、本使ノ探リ得タルトコロニテハ、露國ガ我が大陸ニ於テ讓地ノ要求ニ反對スル所以ノ底意ハ、一旦日本ガ遼東半島ニ於テ好良ノ軍港ヲ手ニ入レタル後ハ、日本ノ勢力ハ敢ヘテ該半島内ニ限ラズ、將來ニ於テハ朝鮮全國及滿洲北部ナル豊饒ノ地全體ニ及ボシ、日本國ヨリ夥多ノ殖民之レニ移住シ、遂ニハ日本國ノ藩圖ニ歸シ、海陸ニ於テ露國ノ領土ヲ危殆ナラシムルコトヲ恐ル、ニアリ。

四月廿九日發

陸奧外務大臣

高平公使

伊國駐劄英國大使告ゲテ曰ク、獨逸國ノ英國ニ對スル惡感情ハ、客年露國先帝薨去ノ節、英

國皇太子殿下露國ニ赴キ、「バミイル」事件ニ關シ露帝ト多少打合セヲ爲シタルコトヨリ起因シタルモノニシテ、目下ノ問題ハ、英國ハ獨逸國隱謀ノ爲メニ露國トノ關係ヲ斷ツベキヤ否ヤニアリト。

四月二十九日午後三時三分發

陸奧外務大臣

林外務次官

伊國代理公使ニ只今面會、此度ノ事件ニ付伊國政府ハ、通常ノ友誼ヨリモ多キ好意ヲ日本ニ向テ抱カル、旨、公使ニ話シアリタル由ニ付テハ、貴官ハ夫レニ付テ訓令ヲ受ケ居ラル、ヤト尋ネタルニ答ヘテ曰ク、伊國ハ此件ノ圓滑ニ終局センコトハ最モ望ム所ニシテ、若シ彼ノ爲メニ(グードオフィス)ヲ要スル場合ニハ、伊國ハ喜デ應ズベシ。又此レト同一ノ望ミヲ持チ居ルベキ日本ノ友誼國、即チ英米國等ト共ニ此和局ヲ結ブコトニ勗ムベシトノ意ヲ日本政府ニ傳ヘヨトノ訓令ヲ受ケ居レリト。

機密電報發送

サシカエ

四月三十日發

陸奧外務大臣

加藤公使

英國駐在ノ獨逸國大使ハ其書記官ヲ遣ハシ本使ニ面晤ヲ求メタルユヘ、本月廿九日本使ハ同大使ヲ訪ヘリ。大使曰ク露國ノ感情益々激昂シ佛國ハ今トナリテハ同盟ヲ去ラント欲スルモ之ヲ爲シ得ベカラザルナリ。又獨國ハ從來ハ勿論今日モ日本國ニ對シ常ニ友情ヲ懷キ居ルガ故ニ、圓滑ニ本件ヲ結了セシメント欲スル情甚ダ切ナリト。本使ハ大使ニ向ヒ若シ獨乙國ガ斯クマデ日本國ニ對シ友情アラバ何故ニ同盟ニ加ハリタルヤト詰問シタルニ大使ハ夫レトハ明言セザレドモ、歐洲交渉ノ政略ハ、獨乙國ヲシテ同盟ニ加ハラシメタル眞實ノ源因ナリトノコトヲ暗ニ言ヒ顯ハセリ。又之ト同時ニ大使ハ獨乙國ガ同盟ニ加ハリタルハ、日本國ノ爲メニ幸ナリ。何トナレバ獨乙國ハ露佛兩國ニ說キテ大ニ其要求案ヲ輕減セシメタリト告ゲタリ。

大使ハ日本國ガ遼東ノ一時占領ニテ満足セラルベキヲ勸告シ、所謂一時ノ占領ハ將來何時ニテモ永遠ノ占領ニ變換スルヲ得ベシト言ヒ、其先例ヲ示セリ。且ツ永遠占領ト迄至ラザルモノニシテ、日本國ニテ承諾スベキ取捌方アレバ、本使ヨリ通知次第、本件結了ニ盡カスベキ旨本國政府ニ申立ツベシト言ヘリ。同大使ノ得タル報告ニ依レバ、清國ハ多分條約ヲ批准スベク、然レドモ批准ハ各國ノ抗議ヲ減ズルコトナク、却テ日本國ガ其邦土ヲ拋棄スルニ於テ困難ヲ加ヘント言ヘリ、

四月三十日京都

在露西公使
在獨青木公使
在佛曾禰公使

陸奧外務大臣

在日本^{獨國}公使ヨリ提出セシ覺書ニ對スル回答、即チ左記ノ覺書ヲ^{露獨}佛文ニ譯シ之ヲ其國政府ヘ差出サルベシ。

日本帝國政府ハ^{獨國}皇帝陛下ノ特命全權公使閣下ガ、其本國政府ノ名ヲ以テ帝國政府ヘ差出サレタル覺書ヲ最モ慎重ニ査閱シ了セリ。日本國^{獨國}皇帝陛下ノ政府ハ^{露獨}佛國大統領ノ政府ノ友誼ノ勸告ヲ熟考シ、且ツ茲ニ再ビ兩國間ニ存スル親密ノ關係ヲ重視スル證據ヲ表彰セ

機密電報綴込

ント欲スルガ故ニ下ノ關係ノ批准交換ニ因リ、日本國ノ名譽ト威嚴トヲ完フシタル後別ニ追加定約中へ左ノ修正ヲ加フルコトニ同意ス。

第一、帝國政府ハ其ノ奉天半島ニ於ケル永代占領權ハ金州廳ヲ除ク外ハ總テ之ヲ放棄スルコトニ同意ス。尤モ日本國ハ其放棄シタル領土ニ對シ、之ニ代フベキ報酬トシテ相當ナル金額ヲ清國ト協議シテ之ヲ定ムルコトアルベシ。

第二、然レドモ帝國政府ハ清國ニ於テ日本ニ對スル其條約上ノ義務ヲ全然履行スルマデハ、擔保トシテ前記ノ領土ヲ占領スルノ權アルコトト知ルベシ。

右ノ覺書ヲ^{露獨}佛露國政府ニ渡サルトキニ速カナル回答ヲ要求セラルベシ。

佛露國政府ニシテ右ニテモ尙ホ満足セザル模様ナラバ、閣下ハ閣下ノ意見トシテ、彼等ガ最初差出シタル覺書ハ其儘ニテ、少シモ變更スルコト能ハザルヤ、或ハ又本件調停ノ方法ニ關シ別ニ申出スコトアリヤ否ヤ問ヒ質サルベシ。

四月三十日午後五時四十分發

林外務次官

陸奧外務大臣

三公使ヘノ回答ノ覺書ハ、無論ニ佛文若クハ日本文ニ翻譯セラルベシ。尤モ此地ヨリモ直チニ西、青木、曾禰三公使ヘ電訓シ、右覺書ヲ夫々ノ政府ニ提出セシメ、彼等ノ決答ヲ促サシムル積リ故、貴官ハ成丈手早キ手段ヲ取り先ヅ在東京ノ露佛獨三公使ニ後刻電報スベキ覺書ヲ渡シ且ツ左ノ口上ヲ述べラレタシ。(此覺書ハ外務大臣歸京ノ上、親シク御渡シ申ス筈ナレドモ、同大臣病氣未ダ全快ニ至ラズ、京都ニテ未ダ 兩陛下ニ拜謁スル能ハザル程ナレバ、晝夜兼行ニテ歸京スル能ハズ。然ルニ平和條約批准交換ノ期日相迫リ居ル故此電信ヲ本官ニ發スルト同時ニ、「ピートルスブルグ」「パリス」「ベルリン」駐在ノ我公使ヘモ電訓シテ、貴國政府ニ通知セシメ置キタル由ナレバ、貴公使モ右ノ事情ヲ斟酌セラレ、方今兩國ノ間ニアル問題ガ、一日モ早ク事濟ミニナル様盡力ヲ乞フ旨、特ニ外務大臣ヨリ申越シタリトノ旨述べラルベシ。又佛國公使ニハ特ニ此覺書ハ日本政府ガ平和回復ノ一日モ速カナランコトヲ希望スル爲メ、十分ニ讓與ヲシタルモノナルニ付、是レニテ佛國政府ハ勿論、他ノ政府モ異議ナキ様十分盡力セラレタシト申添ヘラレタシ。

四月三十日京都發

機密電報綴込

在英加藤公使
在米栗野公使
在伊高平公使

陸奧外務大臣

速カニ平和條約ノ批准ヲ確ムル爲メ、日本政府ハ日本國ノ權利ト、他國ノ利益トヲ調和セシムルノ得策タルヲ慮リ、左ノ回答ヲ送ルベキ旨在露西公使ヘ訓令セリ。

「在日本露國公使ヨリ提出セシ覺書ニ對スル回答即チ左記ノ覺書ヲ佛文ニ譯シ之ヲ獨佛露國政府ヘ差出サルベシ」(云々以下略之四月三十日發) 佛國及獨逸國ヘノ回答モ右ト同一ナリ。

五月一日午前九時廿五分發

陸奧外務大臣

林外務次官

三公使ヘハ今朝早速面會ヲ申入レシガ、三公使何時モ揃ツテ來省スル故、露公使ハ橫濱ニ在ルヲ以テ面會ハ少シク後ル、ナラン。又此度ノ申出ニ付テハ往復ノ爲メ日數ヲ要スベシト信ズ。若シ外國公使ヨリ其内休戰滿期ノ時ノ處置ヲ如何スルトノ問ヒアラバ。如何答ヘテ然ルベキヤ、本官心得ノ爲メ御内意ヲ承リ置キタシ。

五月一日午前十時三分發

陸奧外務大臣

林外務次官

御歸京ヲ望ム程ノ用事アルトキハ遠慮ナク申上グベキガ、唯今ノ處何モ差支ヘナシ。

五月一日午後五時四十五分發

同 六時十分 着

陸奧外務大臣

林 次 官

只今獨逸公使來省、回答ヲ得テ直チニ歸レリ。言語舉動トモ別ニ報告スベキ程ノ事ナシ。

五月一日午後五時五十五分發

同 七時二十分 着

陸奧外務大臣

林 次 官

佛公使ニ面會、覺書ヲ渡シ、且ツ大臣ヨリ特別ノ周旋ヲ依頼スル旨申述ベタル處、支那ト日本ト將來同盟スルコトハ決シテ之レ無キヤト云フニ因リ、後來ノ事ハ本官ニ於テ確言スルコトハ出來ネドモ、今日ニ於テハ決シテ左様ノ事ナク、從來ニ於テモ兩國ノ事情異ナル故ニ、左様ノ事ハ日本ノ不利益トナルベシト思フト云ヒタルトコロ、佛公使云ク此覺書ノ條件ニテ纏ラン事ヲ特ニ自分ニ御托シノコトハ身ノ面目且ツ日佛兩國友誼上ノ幸ヒナレバ、必ラズ盡力スベシ。自分等ノ受取リタル訓令ニハ、旅順口ヲ日本ニテ占有スルコトハ、支那ヲ危クストアレドモ、極メテ内々ニ御話シ申セバ、頃口屢々露公使ニ此事ヲ話スニ、彼ノ意見ニテハ大連灣ト旅順口ヲ日本ガ占領スルコトハ、露政府モ或ハ承知スベシト云ヒ居レリ。其替リニ朝鮮ノ獨立ニ對シテハ確然タル保證ヲ要求スルモ知レズ。併シ右保證ハ内々ニテ爲シ得ル事故、輿論ヲ激ス

ルノ恐レハ之レアルマジ。此レヨリ又横濱ニ行キテ露公使ト相談セントス。實ハ今朝三公使相談シテ、嚴シキ電信ヲ本國ニ送ル筈ニテアリシト。

五月一日巴里發

京都 陸奧外務大臣

曾 根 公 使

本使ハ我が覺書ヲ佛國外務大臣ニ差出シタルニ同大臣曰ク、本大臣ハ佛國內閣及露獨兩國ト協議ヲ遂ゲタル後ニアラザレバ返答致シ難シト。併シ同大臣ハ之ト同時ニ本件ノ穩ニ局ヲ結ブヲ欲スルノ希望ヲ申述ベタリ。

五月一日伯林發

京都 陸奧外務大臣

青 木 公 使

本使獨逸外務大臣ニ面晤セシニ、前回面晤ノ節ヨリモ我ニ對シ好意ヲ懷キ居ルモノ、如クニテ、直チニ返答シテ曰ク、旅順口ハ直接ニ北京ヲ危フスル原因ナルガ故ニ、日本國ノ占領地ハ何程狭少ナルモ、苟モ其内ニ旅順口ヲ含ムトキハ、其永代占領ニ對シ各國ニ於テ必ず抗議ヲ爲スベシト、右ニ對シ本使ニ於テ大ニ辯駁ヲ試ミタルニ拘ラズ、獨逸國外務大臣ハ唯ダ日本國政府ニテ、占領ト放棄シタル土地ニ代ル所ノ報酬トヲ以テ満足スルコト可ナラントノ勸告ヲ述ベタリ。云々

五月一日京都發

在米栗野公使

陸奧外務大臣

貴電第三十號ニ關シ、閣下ハ國務長官ニ面會シ、清國ノ條約批准ノコトニ付、同長官ハ在清國米公使ヨリ如何ナル回答ヲ得ラレシヤ尋ネラルベシ。

批准交換ノ爲メ、我使節ハ芝罘ヘ向ケ出發シツ、アリ。故ニ清國政府モ其使節ヲシテ批准書ヲ携ヘシメ同所ヘ派遣スル様、清國政府ヲ勸誘アランコトヲ同長官ヘ依頼セラルベシ。

五月一日京都發

在佛曾根公使

陸奧外務大臣

我が提出ノ覺書ニ對スル佛國政府ノ意向宜シキ模様ナレバ、露國ヲシテ我覺書ヲ承諾セシムルニ力ヲ用ユル様、閣下ハ佛國政府ヲ勸誘スルコトニ努力セラルベシ。返電ヲ待ツ。

五月一日午後十一時京都發

林外務次官

陸奧外務大臣

本日午後六時五分發ニテ、二橋ヨリ左ノ通り電報アリ。浦潮斯德港ハ「ステート・オフ、ウアル」ノ地ト宣告サレ、黑龍江地方ハ出師準備ノ命ヲ受ケタルニ因リ、日本人ヲシテ必要ノ場合ニハ當所ヲ立去ラシム爲メ、豫メ用意スベキ様知事ヨリ通知アリタリ。

機密電報綴込

五月二日午前六時三十九分發

〃 六時五十九分着

陸奥外務大臣

林外務次官

露公使ノ昨日來ラザリシハ別ノ理由アルニアラズ。其身横濱ニ在リ、且ツ他ノ公使ヨリ既ニ回答ノ趣意ヲ知り居レバナリ。儀式的ニハ今朝來省スル筈、彼ハイツモ、アクセリセザルナリ。

五月二日 東京發

陸奥外務大臣

林外務次官

本月一日附ヲ以テ清國駐劄米國公使ヨリ東京駐在米國公使ヘ左ノ通り電報アリタリ。
清國政府ハ左ノ事ヲ日本國政府ヘ電報アリタキ旨本使ヘ依頼セリ。

現ニ聞クトコロニ依レバ、露佛獨三國ハ清日兩國間ノ新條約中へ修正ヲ加フルコトニ付、日本國ト商議中ナリト、依テ須ク其ノ定義ヲ俟ツベシ。來八日批准交換ノ期甚ダ切迫セルガ故ニ批准交換ノ期日ヲ十數日展緩センコトヲ提議ス。前記ノ次第日本國政府ノ勘考ノ爲メ電報アリタシ。回答ヲ待ツ。

五月二日發

陸奥外務大臣

青木公使

獨乙國外務大臣ハ本使ノ來訪ヲ請ヒ勸告シテ曰ク、日本國ハ旅順口ヲ放棄スルニ當リ、清國ニ向テ旅順口ノ砲壘等永久ニ取毀ベキコトヲ要求スルヲ得ベシト、本使ハ之ニ答ヘテ、右ノ勸告ハ全ク必要ナシト斷然タル返答ヲ爲シタリ。

公使館雇外國人「シイボルト」ノ報告ニ依レバ、當地駐在清國代理公使ハ、北京政府ヨリノ訓令ニ因リ、本日獨乙國外務大臣ヲ訪ヒ、講和條約批准ノ件ニ付其意見ヲ尋ネタルニ、獨乙國外務大臣ハ之ニ答ヘテ、該件ハ單ニ日本國ト清國トノ間ノ事ニシテ、獨乙國ニ於テ其批准拒絶

ノコトヲ勸告スルコト能ハズト告ゲタルニ、清國代理公使ハ右ハ已ニ露國ノ勸告シタルトコロナリト答ヘタレドモ、獨乙國外務大臣ハ其ノ容易ニ信用スルコト能ハザル旨ヲ告ゲタリト、因テ清國代理公使ハ條約批准ヲ可トスル旨其本國政府ニ電報スベシト思ハル。

五月二日 京都發

天津 直隸總督李鴻章閣下

伊藤博文

平和條約交換延期ニ關スル清國政府ノ請求ニ對シ、日本政府ハ延期ヲシテ必要ナラシムル事情ナキ旨ヲ答ヘタリ。且ツ右交換ハ却テ平和回復ノ爲メニ必要缺クベカラザルモノトス。故ニ批准交換ハ少シノ猶豫モナク之ヲ決行スベキ旨ヲ申加ヘタリ。日本政府ハ尙又左ノコトヲ言明セリ

若シ露佛獨ノ申出シニ依リ、平和條約ニ修正ヲ加フベキ都合ニ立至ルトセバ、斯ノ如キ場合ニ於ル類例ニ從ヒ、批准交換ノ前ニ行フヨリハ、寧ロ之ヲ後ニスル方却テ容易ナルベシ。日本全權辨理大臣ハ批准交換期日前ニ芝罘ヘ到着スベシ。

從テ批准交換ハ是非共休戰日限前ニ之ヲ決行スルコト、兩帝國相互ノ利益ノ爲メ、最モ緊要ナリトノコトヲ閣下ヘ切言スルコト拙者ノ義務ト存ズ。

五月三日 京都發

東京 米國公使閣下

陸奧外務大臣

閣下ハ清國政府ヘノ左ノ回答ヲ可成速ニ在清國米公使ヘ電報セラレンコトヲ希望ス。但シ暗號ニ及バズ。

日本政府ハ平和條約批准交換ノ延期ヲシテ必要ナラシムル事情アルヲ見ザルノミナラズ却テ批准交換ハ平和回復ノ爲メニ必要缺クベカラザルモノトス。故ニ批准交換ハ少シノ猶豫モナク之ヲ決行スベシ。

若シ露佛獨ノ申出シニ依リ平和條約ニ修正ヲ加フベキ都合ニ立至ルトセバ、斯ノ如キ場合ニ於ケル類例ニ從ヒ、批准交換ノ前ニ行フヨリハ寧ロ之ヲ後ニスル方却テ容易ナルベシ。伊東已代治閣下ハ批准交換ノ全權辨理大臣ニ任ゼラレ、今既ニ芝罘ヘノ途中ニ在レバ、

交換日限前ニハ必ズ同地へ到着スベシ。

五月二日 京都發

在英 加藤 公使

陸奧外務大臣

一〇二號貴電領收ス。閣下ハ在英國獨乙大使ノ話ヲ利用シ、同大使ニ三國へ對スル我回答ノ趣ヲ告ゲ、獨乙政府ハ右ニテ満足アラン事ヲ望ム旨申サルベシ。且ツ獨國政府ハ日本政府へ對スル從來ノ友誼ニ基キ、露國政府ヲシテ我覺書ヲ速ニ承諾セシムル様盡力アラン事ヲ望ム旨申述ベ、而シテ清國ノ條約批准ハ、日本ヲシテ讓歩ヲ爲スニ困難ナラザルハ勿論、却テ本件ノ處置ヲ容易ナラシムベシトノ事ヲ同大使へ保證サルベシ。貴電一〇二號及本電ヲ在獨青木公使へ通知セラルベシ

五月二日 午前十時十分發

〃 十一時三十分着

陸奧外務大臣

林 次 官

左ノ支那文電報寫シ、只今遞信省ヨリ報告ス。米公使館ヨリハ未ダ通知ナシ。

五月一日午後六時三十分北京發在東京米國公使宛在北京米公使デンビーヨリ、

中國政府請ニ貴大臣ニ轉ニ電ニ日本政府ニ現聞俄。法。德三國與ニ日本商ニ政中日新約ニ須候ニ定議ニ

十四日換約之期太促擬展ニ緩十數日ニ再行ニ互換ニ望即轉商候ニ覆四月初五日慶親王畫押。孫大人

毓汶畫押。徐大人用儀畫押。

五月三日 天津發

京都 伊藤 伯閣下

李 鴻 章

昨日ノ貴電ヲ受取リタリ。條約批准ノ件ハ、清國ニ於テ一般ニ攻撃ヲ受ケタル時、本大臣ハ常ニ其ノ批准ノコトニ付キ苦心シタリ。而シテ今ヤ我が皇帝陛下ハ本大臣ノ奏聞ヲ裁可セラレ、

機密電報綴込

該條約ヲ批准セラレ、批准書ハ規定ノ期日内ニ交換セラルベキ事ヲ貴大臣ニ御通知スルヲ得ルハ、本大臣ノ光榮トスルトコロナリ。前記ノ處置ヲ我が皇帝陛下ニ奏聞スルニ當リテハ、本大臣ハ貴大臣ノ電信中ニ述べラレタルト均シク、速ニ條約ヲ批准スルコトハ、露佛獨三國ヨリ清求シタル修正ト勸告ヲ容易ナラシムベシトノ考ニ職由シタルモノナリ。而シテ本大臣ハ本件ニ付キ速ニ處置ヲ執ルベキ手段ヲ施スベキ旨、臺灣ニ於テハ各種人民ノ間ニ烈シキ騷動起リ居ルガ故ニ、該島ノ事ヲ再ビ勘考ニ付シ其整理ヲ爲スベキ旨、我皇帝陛下ヨリ委任セラレタリ。右ノ目的ノ爲メ本大臣ハ貴大臣ノ友誼アル協力ニ依頼シ得ベキヤ。

五月三日 露京發

陸奧外務大臣

西公使

本使ハ本月一日我が覺書ヲ露國政府へ差出シ、力ヲ極メテ我が提議ヲ貫カント論辯セリ。本月三日露國外務大臣ニ於テ、露國政府ハ我が覺書ハ満足スル能ハザル旨ヲ言明シ且曰ク、昨日内閣會議ヲ開キタルニ、該會議ニ於テ日本國ガ旅順口ヲ所有スル事ハ障害アル故ニ、其最

初ノ勸告ヲ主張シテ動かザルベシト、閣員一致ニテ決議シ、而シテ該決議ハ露國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タル旨申聞ケタリ。

本件ニ關シ、本使ハ露國外務大臣ニ向ヒ力ノアラン限リ手ヲ盡シタレドモ、遂ニ露國政府ヲシテ別ニ本件處理ノ方案ヲモ提出セシムル事能ハザリシハ本使ノ最モ遺憾トスル所ナリ。

千八百九十五年五月三日 天津發

伊藤伯閣下

李鴻章

閣下昨日ノ電報落手セリ。條約批准ニ付キテハ清國ニ於テ一般ニ反對スル所ナリシト雖、余ハ毎ニ之ヲ熟圖セリ。茲ニ我皇帝陛下ハ余ガ建議ヲ採用サレ、既ニ之ガ批准ヲ實行サレタル事ヲ閣下ニ報道スルノ光榮ヲ得タリ。而シテ批准ハ條約ニ於テ規定シタル期日内ニハ交換セラルベシ。我皇帝陛下ガ速ニ批准ヲ決行セラルベキ余ノ建議ハ、閣下ノ余ニ送ラレタル電音ノ趣旨ト全く同感ナルニ基ケリ。且此批准交換ニ依リ、露佛獨三國ノ要求セル改正ノ爲メニモ大ニ利便ヲ與フ可シ。此事件ニ就キテハ迅速ニ處置スルノ手續ヲ爲スベキ旨、我皇帝陛下ノ委任ヲ受

ケタリ。而シテ臺灣島ニ於テハ一般ノ人民ニ非常ナル騷擾ヲ惹起シタレバ、同島ノ件ニ付キテモ猶ホ再慮ヲ爲スベキ旨命ゼラレタリ。依テ余ハ閣下ガ特ニ此件ニ付テ友誼アル協同行爲ニ依賴セン事ヲ切望ス。

五月三日 午後五時廿五分發

〃 九時卅七分着

陸奥大臣

林次官

佛公使ノ内話ニ據ルニ、露公使ハ日本ノ回答ニ對シ露國政府ニ於テ充分満足スルヤ殊更少シク疑ガハン。其譯ハ會テ受取りタル訓令ニモ有ル通り、各國ハ日本ノ旅順口ヲ占領スルコトニ付、元々異存アル旨申シ來リタルガ故ナリト云ヒタル由、依テ佛公使ハ之ニ答ヘ今御互ニ日本ノ情態ヲ察スルニ、土地ノ件ニ就テハ此ヨリ多ク讓ルコトハ、到底日本政府ニ於テ輿論其他民情ニ迫ラレ、事情ノ許サバル所ト察ス。依テ我々ハ可成此ノ此儘ニ承諾セラレン事ヲ本國ニ勸ムル事最モ肝要ナリ。尤モ露政府ニ於テ朝鮮獨立ノ件ニ付懸念アルナレバ、此ガ爲メニ相當ノ

保證ヲ立テサスレバ可ナラント勸メタリシニ、露公使モ此意見ニ同意ノ旨ヲ述ベタリト。獨公使ノ様子ハ別ニ御報告申スベキコトナシ。サテ我レヨリ回答ヲ爲シタル後、露獨二公使ヘハ本國ヨリ今ニ何タル電報モ來ラズ。佛公使ハ一昨夜以來長文ノ電報ヲ以テ數回本國政府ト往復セリ。獨露公使ヨリ回答ノ遅キヲ以テ察スルニ、三國ヨリ回答アル上ハ必ラズ彼我押引ノ談判ト爲リ、早速ノ懸引ヲ要スルニ至ルベシ。其場合ニハ閣下ハ當地ニテ各公使ト御面談アル方彼等ノ感情ヲ善クスルノミナラズ、萬事ニ都合宜シト信ズ。元ヨリ閣下ノ御病狀如何ニ因ルベケレドモ、成ル丈御歸京アリテハ如何。

五月四日 午後四時伯林發

外務大臣

青木公使

本日外務大臣ヨリ本使ノ來訪ヲ求メ、而シテ告テ曰ク、三國ハ日本政府ノ返答ヲ不満足ナリトシテ、重ネテ其要求ヲ提出センコトヲ商議中ナリト、如斯要求ヲ再スル場合ニハ、日本國ガ當惑スベキヲ知ルガ故ニ、同大臣ハ竊ニ提議シテ曰ク、批准交換ノ後、清國政府ニシテ哀願ス

ルニ於テハ、日本政府ハ宜シク償金ニ代ヘ、且ツ旅順ニ將來兵備ヲ置カザルコトヲ約セシメテ大量ニ遼東ノ地ヲ抛棄スベシ。但清國ヲシテ此ノ哀願ヲ爲サシムルノ手段ガ日本政府直接ニ之ヲ執ルコトヲモ得ベク、又ハ獨逸ニ由テ之ヲ爲サシムルコトヲモ得ベシト。

獨逸駐劄ノ英國大使ハ恰モ今眞面目ニ且親切ニ本使ニ告ゲテ曰ク、日本政府ハ今日ニ在テハ獨逸ノ最終ノ勸告ヲ容ルルニ寸時モ猶豫スベカラズ。形勢甚ダ危迫ナリ。今日ニ在テハ英國政府モ既ニ日本政府ノ爲ニ活潑ナル運動ヲ爲スヲ得ズト、蓋シ獨逸ハ露佛ノ同盟ニ依テ歐洲列國間ニ生ズベキ危険ナル混亂ヲ防ガントシ、全力ヲ竭シテ露ト事ヲ共ニスルヲ避クルヲ得ズ。獨逸ハ露佛ノ同盟ヲ避ケ得ザルノミナラズ、却テ之ト事ヲ共ニスルナラン。日本ハ實際ニ於テ朝鮮ヲ左右スル者ナリ。故ニ英大使ハ切ニ勸告シテ曰ク、日本ハ宜シク金州占領ノ眞ニ一時ノ占領ニ止マルヲ三國政府ニ向テ宣告スベシ。若シ日本政府ニシテ此手段ヲ取ルニ於テハ、予等ハ金州ノ占領ハ償金償却ノ終局ト共ニ終ルノ約ヲ以テ、支那ヲシテ更ニ巨額ノ償金ヲ拂ハシムルコトニ盡力スベシ。但シ其償却年限ハ成ルベク永キヲ要スト、又説テ曰、政界ノ形勢他日一變ノ時ナキニアラズ、日本ガ英又ハ獨ト深ク結テ以テ一層其地位ヲ鞏固ニスルノ機會ナキニアラズ。今日ニ在テハ巨額ノ償金ヲ收メ、且根據ヲ臺灣ニ占メ、徐ロニ他日大計畫ノ地ヲ爲スヲ可トス。兎ニ角條約ノ批准ニシテ交換セラレタル上ハ、土地ヲ抛棄スルモ日本ノ尊嚴ヲ傷クルコトナカルベシト思考スト。

五月五日 京都發

在露西公使

陸奧外務大臣

閣下ハ左ノ覺書ヲ佛文ニ譯シ、露國政府ヘ提出セララルベシ。

日本帝國政府ハ、露佛獨三國政府ノ友誼アル忠告ニ基キ、奉天半島ヲ永久ニ占領スルコトヲ放棄スルヲ約ス。

右提出ノトキニ當リテ閣下ハ左ノコトヲ申サルベシ。

日本政府ガ斯ク誠實ニ三國政府ノ忠告ヲ容ルルハ、刻下ノ事體ヲシテ早ク終局ニ至ラシムルヲ望ムガ故ナリ。

閣下ハ若シ露國政府ノ抗議ヲ惹起スルノ虞ナシト思ハレナバ、左記ノ二項又ハ一項ニテモ申述ベラルベシ。

第一、日本政府ハ放棄シタル土地ニ對シ清國ヨリ報酬ヲ要求スルノ權利ヲ保有ス。

第二、日本政府ハ清國ガ日本ニ對スル條約上ノ義務ヲ履行スル爲メノ擔保トシテ、暫時該半島ヲ占領スルノ權利ヲ保有ス。

五月五日 京都發

在獨 青 木 公 使
在佛 曾 瀾 公 使

陸奧外務大臣

閣下ハ左ノ覺書ヲ佛文ニ譯シ獨國政府へ提出セラルベシ。

日本帝國政府ハ佛露獨三國政府ノ友誼アル忠告ニ基キ、奉天半島ヲ永久ニ占領スル事ヲ放棄スルヲ約ス。

右提出ノトキニ當リテ閣下ハ左ノコトヲ甲サルベシ。

露國政府ハ日本政府ノ提出案ヲ承諾スルコト能ハザルガ故ニ、且又刻下ノ事體ヲシテ終局ニ至ラシムルヲ切望スルガ故ニ、最前提出シタル覺書ニ對シ、獨國政府ノ決答ヲ待タズシテ、誠實ニ三國政府ノ初メノ勸告ヲ容ル、ヲ以テ良策ト思考セリ。

左ノコトハ閣下ノ心得迄ニ申進ス。

- 第一、日本政府ハ放棄シタル土地ニ對シ、清國ヨリ報酬ヲ要求スルノ權利ヲ保有ス。
- 第二、日本政府ハ清國ガ日本ニ對スル條約上ノ義務ヲ履行スル爲メノ擔保トシテ、暫時該半島ヲ占領スルノ權利ヲ保有ス。

五月五日 午前二時二十分京都發

林外務次官

陸奧外務大臣

先刻電報シタル西公使ノ電信ニ依リ、露獨佛三國政府へ三國駐在ノ我公使ヲ經テ左ノ如ク回答セリ。

日本帝國政府ハ露佛獨三國ノ友誼アル忠告ニ基キ、奉天半島ニ於ケル土地ヲ永久ニ占領セザルコトヲ約ス。

右ノ趣早速三國公使へ傳ヘラルベシ。尤露國公使へハ特ニ迅速ニ御傳ヘアルベシ。其譯ハ彼ガ自然ニ東洋ニアル露國艦隊ニ通知スルコトアルベシト思ヘバナリ。又左ノコトハ貴官心得マ

デニ申進ズ、右覺書ノ外西公使へハ別ニ電訓シ、同公使ノ見込ニテ露國政府ニ於テ異存ナキ模様ナレバ、放棄シタル土地ニ代ル報酬ノコト、及ビ一時占領ノコト、又ハ其内何レカ一ツニテモ申入ルベキ旨申送レリ。青木曾禰公使へモ心得ノ爲メ同様ノコトヲ申遣ハシ置キタリ。先刻ノ西公使ノ電信ト此電信トヲ黒田伯マデ通知シ、其他ニ在ル内閣員ニ内々話サレンコトヲ依頼スベシ。

五月五日 露京發

陸奥外務大臣

在英 加藤 公使

本使ハ在英獨逸大使ノ請求ニ依リ同大使ニ面會シタルニ、露國ハ到底旅順口ヲ日本ガ永久占有スルコトヲ肯ゼザルベケレバ、早ク日本ニ於テ露國ノ希望ヲ容レザルトキハ、益々葛藤ヲ重ヌルノミナラン。故ニ日本ガ遼東半島ノ全部ヲ拋棄スル様、我ガ政府ニ申立ツベキ旨、本使ニ切望シタリ。又同大使ハ若シ日本ト歐洲諸國^{露佛獨ノ意ナラン}トノ相談整ヒタル上ハ、清國ヲシテ遼東半島ノ代リニ償金ヲ日本ニ支拂フコトヲ申出ス様、歐洲各國ヨリ清國政府ニ掛合フコトモ出來得

ベシ。斯クセバ威嚴ヲモ保ツコトヲ得ルナラント申述ベタリ。

本使ハ同大使ニシテ此言アリシハ、全ク獨逸政府ガ青木公使ノ意ヲ枉グズシテ、共ニ協議シ兼ヌルヲ以テ、特ニ大使ニ訓令シテ本使ニ之ヲ圖ラシメタルモノナラント察シタルニ付、本使ハ本使ノ意見トシテ之ニ答へ、日本政府ハ到底此上讓歩シ難シト思フ故、斯カルコトヲ本使ヨリ我政府ニ電報スルモ何ノ益ナカルベシ。又斯ノ如キコトハ總テ直チニ青木公使へ照會セラレタシト申述ベタルニ、同大使ハ元ト之レハ表向キニ御掛合ヲ望マヌ故、貴官ニ申進ズルニテ、若シ青木公使ニ傳フレバ乃チ公然ノ照會トナレバナリト答ヘタリ。

五月五日 午後四時廿七分發

〃 〃 〃 五時四十五分着

陸奥外務大臣

林 外務次官

三國政府へ御回答ノ主意獨佛公使へ通ジタルニ、無條件承諾ハ意外ナリシト云フベキ顔色ナリ。露公使ハ公使館書記官へ托シ知ラセタルユへ面會セズ。

機密電報發送

貴大臣ノ京都御滞留ハ御申越ノ通りニテ此地ニハ目下差支ナシ。

五月五日 午後四時四本分發

旅順口八重山艦ニテ

伊東全權辦理大臣

京都 陸奧外務大臣

貴官芝罘着ノ上、清國全權委員ト會合ノ時、彼ハ或ハ批准交換以前ニ遼東半島ノ善後策、又ハ臺灣處分ノコトニ付豫メ協議決定シ置キタシト請求スルヤモ計ラレズ。斯ノ場合ニハ貴官ハ批准交換ノ外、他事ヲモ商議スル訓令ヲ帶ビズド云ヒ之ヲ謝絶スベシ、而シテ遼東半島ノ放棄ハ日本政府ニテ露獨佛三國政府ニ證言シタルコトナレバ之ヲ實行スルコト勿論ナルモ、其善後策及ビ臺灣處分ノコトハ批准交換ノ後、兩國政府ニ於テ十分ニ商議シ得ベキコトナレバ、兎モ角モ批准交換ヲ行ヒ速ニ兩國間ノ戰爭ヲ止ムルコト必要ナリト主張セラルベシ。此際故障ナク批准交換ヲ終了シ得ルコトハ一ニ貴官ノ材能ニ依頼ス、右總理大臣ト協議ノ上此電信ヲ發ス。

五月六日 午後二時五十五分發（釜山）（午前十一時三十五分旅順口發）

同 三時十七分着

陸奧外務大臣

旅順 伊東辦理大臣

豫定ノ如ク今夕八時横濱丸ニ乗リ込ミ、別ニ肥後丸ヲ率ヒ芝罘ニ赴ク、芝罘着ハ明朝六時ノ積リ。

五月六日 午後十時 釜山發（六日六時十五分旅順口發）

午前十二時十五分着

陸奧外務大臣

伊東辦理大臣

前報ノ如ク今夕八時横濱丸ニ乗込ミ出發、肥後丸未着ニ付後ヨリ回航セシメ吳ルル筈、大本

機密電報綴込

營ヨリ村田中佐及ビ憲兵十名ヲ附セラレ、又燈臺視察ノ爲メ海軍大尉山縣文藏同行。

五月七日 午前十二時五分釜山發（六日午後七時四十五分旅順口發）

同 十二時廿五分 着

陸奧外務大臣

伊東辨理大臣

肥後丸ハ明朝着直チニ芝罘へ發スル筈ニ付、其前御電報アラバ早ク小官ノ手ニ達スベシ御含マデ。

五月七日 接

京都 陸奧外務大臣

在獨 青 木 公 使

獨國外務大臣ハ我が奉天半島ヲ全然放棄シタル事ニ付。口頭ヲ以テ満足ヲ表シタリ。而シテ

他國モ同様満足スベシト同大臣ハ思考セリ。

又同大臣ハ本使電報九十五號ニ示シタル意味ヲ以テ、直チニ清國へ忠告セリ。

五月八日發

芝罘 伊東全權辨理大臣

陸奧外務大臣

更ニ清國ノ請求ニ由リ、日本政府ハ五日間休戦ノ日限ヲ延長スルコトヲ承諾シ、其期日内ニ少シモ早ク批准交換アラン事ヲ清國政府ニ申送レリ。故ニ貴官ハ追テ何等訓令スル迄何事ヲモ爲サズシテ其地ニ滞留スベシ。

五月八日發

在東京 米國公使閣下

陸奧外務大臣

左ノ通り清國政府ヘノ回答、至急在北京米國公使ヘ電報アラシコトヲ乞フ。
日本政府ハ五月七日附在清國米國公使ヨリノ電報ニ接シ、清國ニ於テ批准交換延期請求ノ旨了承セリ。之ニ對シ日本政府ハ左ノ通り清國政府ニ回答セントス。

日本ハ既ニ全ク露佛獨三國ノ勸告ヲ容シ、遼東半島ヲ永久ニ占有セザルコトニ決シタルガ故ニ、該三國ニ於テモ十分満足ヲ表スルコト、信ズ。然レドモ同半島ヲ拋棄スルニ必要ノ取極ヲ設クル爲メ、日清兩政府ハ新タニ商議セザルヲ得ズ。而シテ此ノ商議ハ時日ヲ要スルニ付、日本政府ハ講和條約ノ修正及ビ必要ノ諸取極ハ追テ之ヲ爲スコト、シ、先ヅ其期ニ後レズシテ批准交換ヲ行ハンコトヲ主張スルモノナリ。

然レドモ既ニ批准交換ノ期日終ルニ垂ントシ、且ツ更ニ干戈ヲ交ユルハ兩國ノ利益ニ有害ナルヲ以テ、日本政府ハ停戰ノ時期ヲ五日間延期スルコトヲ承諾シ、其ノ期滿ツルノ以前ニ在リテ、一日モ早ク批准交換ノ行ハレンコトヲ望ム。

五月八日發

天津 總督李鴻章閣下

伊藤總理大臣

清國政府ハ目下露佛獨三國ヨリ批准交換以前ニ於テ、講和條約ニ修正ヲ加フルコトヲ忠告セラレ、清國ト該三國トノ間ニ商議未ダ結了セザルノ故ヲ以テ、批准交換ノ期日及停戰ノ日限延期ヲ請求スル旨日本政府ニ申越サレタリ。而シテ我政府ハ之ニ對シ左ノ回答ヲ爲セリ。

日本ハ既ニ全ク露佛獨三國ノ勸告ヲ容レ、遼東半島ヲ永久ニ占有セザルコトニ決シタルガ故ニ、該三國ニ於テモ十分満足ヲ表スコト、信ズ。然レドモ同半島ヲ拋棄スルニ必要ノ取極ヲ設クル爲メ、日清兩政府ハ新タニ商議セザルヲ得ズ。而シテ此商議ハ時日ヲ要スルニ付、日本政府ハ講和條約ノ修正及ビ必要ノ諸取極ハ追テ之ヲ爲スコト、シ、先ヅ其期ニ後レズシテ批准交換ヲ行ハンコトヲ主張スルモノナリ。

然レドモ既ニ批准交換ノ期日終ルニ垂ントシ、且ツ更ニ干戈ヲ交ユルハ兩國ノ利益ニ有害ナルヲ以テ、日本政府ハ停戰ノ時期ヲ五日間延期スルコトヲ承諾シ、其期滿ツルノ以前ニ在リテ一日モ早ク批准交換ヲ行ハンコトヲ望ム。

曩ニ貴電ヲ以テ期日ニ相違ナク批准交換行ハルベキ旨御言明アリタル後、今日清政府ヨリ前文ノ御請求ニ接シタルハ、日本政府ニ於テ實ニ驚訝ノ至ニ堪ヘズ。然レドモ猶ホ日本政府ニ於テ期限ヲ延バシ、最早此上延期スル事能ハズト回答シタルハ、全ク我政府ガ平和ヲ望ミ、其ノ和衷ノ精神ニ出デタルモノナリ。

斯ル事情ナルヲ以テ、本大臣ハ茲ニ再ビ至急ニ批准交換ノ行ハル、事最モ緊要ナル旨ヲ貴大臣ノ心ニ印セン事ヲ望ミ、若シ交換出來ザル場合ニ於テハ、已ムヲ得ズ由々敷結果ヲ生ズルニ至ルコトアルベキヲ申進ズ。

五月八日午前六時五十五分東京發

京都 陸奧外務大臣

在東京 米國公使

本使ハ唯今五月七日北京發ニテ在清國米國公使ヨリ左ノ電報ニ接到セリ。

清國政府ハ左ノ通り日本政府ヘ電報セラレンコトヲ米國公使ニ請求ス。

過般清國ハ講和條約批准交換ノ時日ヲ延期センコトヲ望ミ、米國公使ニ請ヒ、之ヲ日本政府ニ電報シ、其同意ヲ求メタルニ、日本政府ハ講和條約批准延期ヲ必要トスル事由ナキガ故ニ、其期ニ後レズ速ニ之ヲ行フヲ望ム旨回答セラレタリ。是ニ於テ清國ハ二名ノ批准交換全權委員ヲ芝罘ニ簡派シタリ。然ルニ數日以前ヨリ露佛獨ノ三國ハ、屢々批准交換期日ヲ延バサンコトヲ望ミ、該三國ヨリノ通知ヲ俟テ之ヲ行ハレ度旨、清國政府ヘ申込シタルモ、今日ニ至ルマデ

清國ハ未ダ何等ノ通知ニ接セズ。然ルニ清國ト露佛獨トハ永年友邦ノ間柄ナルヲ以テ、今更其希望ニ違背スルハ清國ノ敢テ忍ビザル所ナリ。而シテ恰モ日本ヨリ批准交換延期ヲ必要トスル事由ナキ旨ノ電報ニ接到スルヲ得タリ。

然ルニ聞ク所ニ據レバ、遼東半島一件ニ關シ目下其處分法論究中ニシテ、今日ノ形勢已ニ前日ニ異ナルモノアルガ如シ。而シテ清國政府ノ考フル所ニ依レバ、批准交換ノ後此事件ヲ結了スルハ、寧ロ其以前ニ在テ満足ナル商議ニヨリ之ヲ決スルノ優レルニ如カズト。此故ニ清國ハ茲ニ再ビ露佛獨ノ通知ヲ得ル迄、批准交換ヲ延期スルコトニ同意セラル、様、日本政府ニ希望スル旨、直チニ電報セラレンコトヲ米國公使ニ依囑スルモノナリ。依テ何卒日本政府ハ清國ニ該件ヲ結了スルノ時間ヲ與ル爲メ、批准交換並ニ停戰ノ日限ヲ延期セラレ度シ。此件御思考ノ上速答アラン事ヲ待ツ。又清國政府ハ芝罘ニ於テ命ヲ待ツベキ旨、已ニ批准交換委員ニ訓令シタル故、日本政府モ亦速ニ同様ノ訓電ヲ日本委員ニ下サレンコトヲ望ム。

五月八日 午前十時三十分接

京都 陸奧外務大臣

在佛 曾 禰 公 使

佛國外務大臣ハ日本政府ノ決斷ニ付大満足ヲ表シ、二日ノ後佛國政府ノ回答ヲ爲スベキ旨申聞ケタリ。

五月八日 北後七時三十分接

京都 陸奧外務大臣

芝罘 伊

東

昨朝七時到着セリ。

公文ヲ以テ通知シタル後チ午後清國全權委員伍廷芳、聯芳ニ面會シ、午後九時ヨリ十二時迄再ビ會合シ、批准交換執行ノ準備ハ殆ンド之ヲ整ヘタリ。

今早朝會合ノ時ニ當テ、清國委員ハ清國政府ヨリ左ノ電信ヲ受取り之ヲ示セリ。

露國政府ハ日本政府ニ向ヒ、批准交換及ビ休戦ノ日限ヲ延期センコトヲ主張セリ。而シテ在清國米國公使ヲ經テ右ノ報ヲ日本政府ニ電報シタリ。

總理衙門ハ休戦期限内ニハ右回答ニ接スルコト覺束ナク思フガ故ニ、清國政府ハ三國政府ノ勸誘ニ基キ、日本政府ニ於テ批准交換ノ日限ヲ延期セラレンコトヲ希望スル旨、日本

全權大臣ヨリ日本政府ヘ電報アラシメ全權大臣ニ依頼スベシ。

清國委員ノ全權ハ甚ダ不完全ナリ。然レドモ御訓令ノ趣ニ從ヒ抗議セズ。

批准交換準備手續ニ關シテモ漸クニシテ彼等ヲ承諾セシメタリ。然レドモ清國政府ヨリ訓令ナキ以上バ彼等ハ批准交換ヲ決行スルコト能ハズ。

本使ハ今朝是非共交換セント迫リタレドモ、餘リ之ヲ責ムルニ於テハ、其結果或ハ破裂ニ至ルノ模様アリタルニ付、若シ今後迄ニ貴大臣ヨリ別ニ御訓令ナケレバ、批准交換ノ日限ヲ三日間延期スルコトノ準備ヲナスベシ。

若シ清國ニシテ之レヲモ拒絶スルニ於テハ、批准交換ヲ拒絶スルモノト見ルノ外ナケレバ、其上ハ清國政府ヘ抗議ヲ出シ、本使ハ直ニ出發スベシ。

五月八日 午後七時三五分接

京都 伊藤伯閣下

李 鴻 章

拙者ハ政府ノ訓令ニ從ヒ、芝罘ニ於ケル清國全權委員ニ訓令シ、直チテ批准交換ヲ執行スベ

キ旨ヲ命ジ、且是迄延期ニ係ル總テノ請求ハ之ヲ撤回スルコトヲ閣下ニ報道ス。

五月八日 午後十時三分接

京都 陸奥外務大臣閣下 東京 米 國 公 使

本使ハ在清國米國公使ヨリ五月八日付左ノ電報ヲ唯今接手セリ。

清國政府ハ左ノ電報ヲ日本政府ヘ轉送方本使ヘ依頼セリ。

清國政府ハ本日三國政府ノ回答ニ接シタルニ付、直チニ電報ヲ以テ清國全權委員伍廷芳聯芳ニ訓令シ、約定ノ日ニ批准交換ヲ爲スコトヲ命ゼリ。

清國政府ヨリ昨日發シタル期限延期請求ノ電信ハ最早御懸念ニ及バズ。

清國ハ日本全權大臣接待ニ關スル相當ノ準備ヲ爲セリ。

五月八日 午後六時三十五分芝罘發

京都 陸奥外務大臣 伊東全權辨理大臣

清國全權委員ハ今朝非常ニ本官ヨリ迫ラレタル爲メ、今午後本官ヲ來訪シ、今夜十時迄批准交換ヲ延期スルコトヲ請求シ、如何ナル事情アリテモ必ズ之レヲ行フベキコトヲ盟言セリ。

五月八日 京都發

在露 西公使 在獨 青木公使 在佛 曾瀾公使 陸奥大臣

清國ハ三國政府ヨリ批准交換ヲ延期スル様忠告ヲ受ケタリトノ理由ヲ以テ、再ビ延期ヲ請求シ來レリ。批准交換ノ期日已ニ今日ニ迫リ居ル故、再度ノ交戦ヲ避ル爲メ、不得已五日間休戦期限ヲ延期シ、右延期日限中ニ批准交換ヲ行フコトヲ承諾セリ。

三國政府ノ忠告ヲ無條件ニテ許容シタル上ハ、最早彼等ヨリ干涉スル餘地ナシト思考ス。故

ニ露政府ハ尙未ダ其清國ヘノ忠告ヲ撤回シ居ラザレバ、閣下ハ之ヲ撤回スル様同政府ヘ請求サルベシ。

又交戦ヲ全然停止スルコトハ批准交換決行ノ後ニ在ルベシトノコトヲ告ゲラルベシ。

五月八日 京都發

芝罘 伊東全權辨理大臣

陸奥大臣

李鴻章ヨリ唯今批准交換延期請求ニ係ル都テノ請求ヲ撤回スル旨申來レリ。故ニ本大臣ヨリ差出シタル前電ニ拘ハラズ、直チニ批准交換ヲ執行サルベシ。

五月八日 京都發

直隸省總督 李鴻章伯閣下

伊藤博文

本日ノ貴電領收セリ。清國政府ハ批准交換延期ニ係ル都テノ請求ヲ撤回シ、其ノ全權委員ニ訓シ、直チニ交換ヲ執行スル様命ジタルトノコトヲ欣然領承セリ。隨テ日本政府モ其全權大臣ニ同様ノ事ヲ訓令セリ。就テハ拙者ノ前電ハ都テ之ヲ取消サレ、前記ノ事ヲ貴政府ヘ御通告アラシコトヲ乞フ。

五月九日午前十時十分發

京都 陸奥外務大臣

芝罘 伊

東

批准交換ハ八日午後十一時三十分之ヲ執行シ了セリ。
本使ハ直チニ旅順口ニ向テ出發スベシ。

五月九日京都午前二時三十分發

芝罘 伊東全權辨理大臣

陸奥大臣

英文電報ハ正確ナリ。併シ直ニ批准交換ヲ執行スベキ旨申遣シタル後電ヲ以テ之ヲ取消セリ。

五月九日

在露西公使

陸奧外務大臣

五月八日芝罘ニ於テ講和條約批准交換相濟タリ。

日本政府ハ露佛獨三國ノ勸告ヲ容レ、奉天半島永久占有ヲ拋棄セリ。但シ此拋棄ニ關スル日清兩國間ノ諸取極ハ之ヲ後日ニ讓リタリ。
在歐米我公使館ヘモ轉電アリタシ。

五月九日午前十一時十五分東京發

陸奧外務大臣

林外務次官

五月九日午前一時芝罘發ニテ、批准交換相濟タル旨、在芝罘米國領事館「リード」ヨリ在東京米國公使ヘ來電アリ。

五月九日午後四時三十分發
五時二十分着

陸奧外務大臣

林次官

露獨佛三國公使本省ニ來リ、日本政府ノ處置其宜キヲ得テ、一般ノ平和ヲ得タルヲ賀スル旨、各其政府ヨリ訓令ヲ受ケタリト云ヘリ。右三公使ノ口上覺書ハ郵便ニテ送ルベシ。

五月九日接

京都 陸奧外務大臣

在露西公使

五月五日貴電ノ趣ニ從ヒ、本使ハ同日露國政府ヘ我覺書ヲ提出セリ。而シテ五月六日露國外

機密電報綴込

務大臣ニ面會シ、貴大臣訓令ノ趣ヲ傳ヘタリ。

同大臣ハ我回答ニ對シ大ニ満足セリ。而シテ在日本露國公使ニ訓令シテ、同大臣欣悅ノ趣ヲ我政府ヘ傳ヘシメタリト云ヘリ。

日本政府ハ其拋棄シタル領土ニ對シ、報酬ヲ要求スル權利ヲ享有スル旨申シタルトキ、同大臣ハ其報酬ノ餘リ多キニ過ギザランコトヲ望メリ。若シ清國ニ求ムルニ過多ノ報酬ヲ以テセバ我暫時ノ占領ハ變ジテ實際上ノ占有トナランコトヲ恐レ居レリ。本使之レニ答フルニ、本件ハ日清兩國相互ノ間ニ之レヲ協定スベシト云ヒシニ、同大臣ハ自分一己ノ説トシテ曰ク、清國ト談判ヲ開ク前ニ、要求スベキ金高ヲ極メ置クコト宜シカルベシト。

右ノ如キ都合ナレバ、時機惡シク議論ヲ生ズルノ恐レアリタルニ付、第二項ノ權利保有ノコト(即チ擔保トシテ暫ク占領スルコト)ハ之レヲ無言ニ附シタリ。

在日本露公使ハ多分此件ニ付、貴大臣ヘ申出ルコトアルベシト思考ス。

五月九日午前十一時五十分天津發

伊藤 閣下

李 鴻 章

拙者ハ昨八日午後三時三十分、及ビ同十時四十分附兩回ノ貴電ニ接シ、閣下和衷ノ精神ニ據リ、日本政府ニ於テ全ク露佛獨三國ノ友誼アル勸告ヲ容レ、遼東半島ノ占領ヲ拋棄シ、爾後更ニ講和條約修正ヲ商議スルコトニ決セラレタルハ拙者ノ怡悅スルトコロナリ。抑モ此舉タルヤ日本政府ニシテ一層寬裕ノ意志ヲ有スルニ及ビタルヲ證明スルニ足レリ。以テ無疆ニ日清兩國ノ交誼ヲシテ益々親密タラシメ、而シテ又全世界ノ希望ニ副フヲ得ベシ。

在芝罘我全權委員ハ、勅命ニ從ヒ、昨八日午後批准交換ヲ行ヒタル旨報告シ越セリ。

日本政府ガ批准ノ延期ヲ承諾セラレタルコトハ、閣下ノ御請求通り之ヲ取消トスベシ。前文ノ次第我政府ヘモ電報シ置ケリ。

口上覺書

露國皇帝陛下ノ政府ハ、日本ガ遼東半島ノ永久占有權ヲ拋棄セラレタルノ通知ヲ得、日本國皇帝陛下ノ政府ガ此措置ニ依リ、重ネテ其高見ヲ彰表セラレタルヲ認メ、宇内ノ平和ノ爲メ茲ニ其祝辭ヲ述ブ。

口上覺書

獨逸國皇帝陛下ノ政府ハ、日本ガ遼東半島ノ永久占領權ヲ拋棄セラレタルノ通告ヲ得、日本國皇帝陛下ノ政府ガ之ニ依テ重テ其卓見ヲ彰表セラレタルヲ認ムベキモノトス。因テ宇内ノ平和ノ爲メ茲ニ日本國政府ニ向テ其祝辭ヲ述ブ。

口上覺書

佛朗西共和國政府ハ、日本國政府ガ遼東半島ノ永久占有權ヲ拋棄スルコトヲ承諾セラレタル旨公然ノ通知ニ接シ、日本國皇帝陛下ノ政府ガ之ニ依リテ再ビ其卓見及節制ヲ彰表セラレタルヲ認メザルヲ得ズ。而シテ宇内ノ平和ノ爲メ、佛國政府ハ日本政府ニ向テ茲ニ懇篤ナル祝辭ヲ述ブ。

五月九日午後十二時發遣

在露西 公使

陸奧外務大臣

日本政府ハ此度ノ我處置ニ對シ、露國政府ガ十分ノ満足ヲ表シタルヲ怡悅ス。又去五月一日貴官ニ電報シタル浦鹽斯德知事ガ、我貿易事務官ニ與ヘタル告知ハ、最早無効ニ屬スルモノト信ズ。貴官ハ右ノ趣、體好ク露國政府ニ通知スベシ。

五月九日午後五時三十二分露京發

京都 陸奧外務大臣

在露西 公使

五月八日附貴電ニ關シ、露國外務大臣ハ本使ニ告ゲテ曰ク、露國政府ハ曩キニ清國政府ガ批

機密電報發送

准交換ヲ行フコトニ付、露國ノ忠告ヲ求メタルヲ以テ、先ヅ其期限ノ最終日迄之レヲ見合ハス
 コトヲ勸告シタリ。尤モ當時恰モ日本政府ノ回答露國政府ニ達シ居タルヲ以テ、露國ヨリ日本
 ヘノ勸告事件ハ已ニ結了シ、批准交換ニハ何等ノ差支アラザルユエ、清國ハ其政府ノ便宜上ニ
 據リ如何様ニモナシ然可キ旨回答シ置キタリト。同外務大臣又曰ク、露國政府ハ決シテ批准
 交換ノ期日ヲ延スベキ旨清國政府ニ忠告シタルコトナク、且同大臣ノ知ル所ニテハ、佛獨兩國
 モ亦斯カル忠言ヲ清國ニ與ヘシコトナシト。是ニ於テ本使ハ同大臣ニ、批准交換ヲ成ル可ク速
 ニ執行スル様清國ヘ勸告セラレ間敷ヤト請求シタルニ、同大臣ハ之レヲ爲シ試ムベキ旨返答シ
 タリ。

五月九日午後四時五分巴里發

京都 陸奧外務大臣

在佛 曾根公使

佛國外務大臣ハ、決シテ佛國政府ヨリ批准交換ノ延期ヲ清國ニ忠告シタルコトナキ旨ヲ述ベ
 タリ。又同大臣ハ獨露兩國ト共ニ、成ル可ク速ニ批准交換ノ行ハル、様盡力スベキ旨本使ニ約

シタリ。

五月十日午後一時三分着

陸奧外務大臣

在獨 青木公使

各國ガ批准交換ノ延期ヲ清國ニ忠告セリト云フハ眞實ニ非ラズ。兎ニ角獨露兩政府ハ之レ
 行フベキコトヲ清國ニ忠告シタリ。而シテ已ニ獨逸政府ハ批准交換濟ノ報ニ接シタリ。

五月十一日 午前十時廿分着
 同 十一時卅五分着

陸奧外務大臣

林次官

英公使館書記官(ラウサー)只今來着、同氏ヲ公使不在中代理公使ト爲スコトニ關スル英國
 外務大臣ヨリノ書翰ヲ持來シ、且本國政府ヨリ訓令ナリトテ述ベテ曰ク、近頃英國ハ臺灣ヲ占

機密電報綴込

領スルトノ風説アレドモ全ク虚説ナリ。英國ハ決シテ彼ノ島ヲ占領スルノ意ナキコトヲ宣言ス。但シ此宣言ハ新聞紙ニ出ヌヨウニセラレタシト。

本官思フ。右ニ對シテ相當ノ謝辭ヲ英文ニテ御電報アリタラバヨロシカラシ。

秘 急

明治廿八年五月十二日

内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

- 外務大臣 大藏大臣 海軍大臣 文部大臣
- 逓信大臣 内務大臣 陸軍大臣 司法大臣
- 農商務大臣 黒田議長

五月十一日天津發李鴻章電報十二日接

右廻覽ニ供ス

五月十一日天津發十二日接

京都 伊 藤 伯 李 鴻 章

我政府ノ命ニ依リ左ノコトヲ閣下ニ傳達ス。

頭等全權大臣李鴻章ヨリ媾和條約ノ批准ヲ皇帝陛下ニ上奏セル末、該條約ヲ批准セラルルノ上諭ヲ發セラレタリ。然レドモ該上諭中左ノ一節ヲ加ヘラレタリ。

朕聞ク露佛獨三國ハ、日清新條約中へ修正ヲ加ヘントシテ、三國聯合シテ日清兩國ト商議中ナリト。若シ該修正ニシテ本條約ノ規定スル所ト矛盾スルトコロアレバ、該修正ニ因リ本條約ヲ修正セザルヲ得ズ。此ヲ欽セヨ。

因テ清國政府ハ今前記ノ事ヲ日本政府へ通知ス。又前キニ清國政府ヨリ休戰延期ノ事ヲ請求セルニ當リ、米國公使デンビー氏ヨリ左ノ回答ニ接セリ。即チ日本政府曰ク、批准交換ハ規定ノ時期内ニ之ヲ行ヒ、若シ露佛獨三國ニ於テ欲スル所ノ修正ヲ加フルコト必要ナルトキハ、批准交換前ニ之ヲ爲サンヨリハ、寧ロ交換後ニ於テ之ヲ爲ス方却テ容易ナラント。清國モ亦此處

理法ニ從ヒタリ。因テ何等ノ修正アル時ニハ、批准交換濟ノ條約ノ外、別ニ追加定約ヲ締結シ兩締盟國ニ於テ之ヲ遵奉スルコト必要ナルベシ。

又清國政府ハ臺灣ニ於テ人民一般非常ニ激昂シ、終ニ内亂ニ至ルヤモ測ラレザルガ故ニ、批准交換ノ後ニ、該事情ヲ勘考シテ、其救濟策ヲ講ズルコト必要ナルベシト思考ス。

清國頭等全權大臣ハ、已ニ右ノ次第ヲ日本國總理大臣ヘ電報シ置タリ。

五月十一日發

在英 加藤公使

陸奧外務大臣

五月十一日在日本英國臨時代理公使外務省ヘ來リ、林外務次官ニ面會シ、英國ハ臺灣ヲ占領スルノ企アリトノ新聞紙ノ風説ニ關シ、英國ハ決シテ右ノ如キ企圖ヲ懷クモノニ非ル旨、本國政府ノ訓令ニ依リ林次官ニ告ゲタリ。

閣下ハ英國外務大臣ト面會シ、右友誼アル證言ニ對シテハ、勿論先般來ノ紛紜中、英國政府ガ始終我ニ對シタル友誼ノ意嚮ニ對シ、我政府ハ深厚ナル感謝ノ意ヲ表スル旨、口頭ヲ以テ同

大臣ヘ傳ヘラルベシ。

五月十二日午前十時四十分接

外務大臣

在獨 青木公使

本日獨國外務大臣ヘ面會ノ節同大臣ハ左ノ事ヲ申サレタリ

一、日本ハ追加償金ニ關シ直ニ清國ト更ニ談判ヲ開クベシ。獨逸ハ若シ依頼サル、ニ於テハ我ヲ助クル積ナリ。

二、此度ノ事ニ付我國ガ意ノ如クナラザリシハ、重ニ大國中ノ一國ト内密ノ話シ合付キ居ラザリシ爲メナリ。此事ハ將來ノ困難ヲ避クル爲メ心ニ印シ置カルベキコトナリ。

三、同大臣ハ五月六日獨國政府ヨリ北京ヘ發シタル電信ヲ示セリ。右電文ニ、獨逸ハ若シ清國ガ批准セザルニ於テハ、今後ハ(如何様ノ事起ルモ)打捨テ置クベシトアリ。此ニ依リテ獨國政府ノ意向ヲ察スルニ足ル。

四、此度ノ交渉事件ニ、西班牙國モ連合ニ加入シタル哉否ト問ヒタルニ、同大臣ハ判然然リ

ト云フコトヲ否ミタリ。然レドモ若シ佛蘭西若クハ西班牙ヨリ問合セルコトモアラバ、臺灣及澎湖島ハ日本ニ於テ占有スル決心ノ確答ヲ與フル方可然トノコトヲ勸告セリ。

五月十二日 午前十時五十分發
午後一時十八分接

陸奧外務大臣

香港 中川領事

英艦「リヤンダー」ハ打狗ヨリ長崎へ赴クニ付、其代リトシテ英艦「スバルタン」ハ打狗へ向ケ當港ヲ出帆セリ。

臺北ニ在ル英國水兵ノ數ハ二十五名、獨逸水兵ノ數ハ三十名ナリ。「スバルタン」號モ亦十名ノ水兵ヲ載セ行キタリ。

英國ノ船藉ニアル福建號ハ清國へ賣渡サレ。數日前四百名ノ清兵ト兵器彈藥ヲ搭載シテ淡水へ向ケ出帆セリ。

五月十二日午後二時五十一分廣島發

陸奧外務大臣

伊東辨理大臣

昨夜馬關ニテ檢疫ノ爲メ半時間留マリ、正午此地着、今夜八時汽車ニテ立ツ、明日午前御地着ス。

五月十二日發

天津 直隸總督李鴻章閣下

京都 伊藤博文

十一日發閣下ノ電信領收セリ。

日本國政府ハ必要ノ準備整ヒタル上ハ、奉天半島ニ關シ清國ト談判ヲ開クベシ。臺灣ニ關シテハ只今左ノ通り清國政府へ通告セリ。

日本國 皇帝陛下ヨリ、臺灣澎湖島及其ノ所屬地ノ總督ニ任命セラレタル、海軍大將子爵樺山資紀閣下ハ、下ノ關條約第五條末項ニ基キ、日本國全權辨理大臣ノ職務ヲモ執行

機密電報綴込

スベキ旨、併せて命令セラレタリ。

同總督閣下ハ、今ヨリ凡ソ二週間ノ中ニ任地ニ到着スベシ。而シテ到着ノ上ハ其ノ任
ゼラレタル特別職務ヲ執行スベシ。

日本政府ハ清國政府ニ於テモ、同總督閣下ニ會商スベキ全權辦理大臣ヲ直ニ任命セン
コトヲ希望シ、併せて其任命シタル全權大臣ノ官職姓名ヲ日本政府へ通知センコトヲ望
ム。

右ノ事情ナルニ付、拙者ハ閣下ニ左ノ事ヲ告グ。

日本政府ハ、若シ清國政府ニ於テ我請求ノ通り、猶豫ナク我總督ニ會商スベキ清國全
權辦理大臣ヲ派遣セバ、閣下ノ懸念サル、危難ハ之ヲ避クルコトヲ得ベシト思考ス。

我總督ニ於テ其ノ任ニ就キシ以上ハ、日本政府ニ於テ平和秩序ヲ保ツノ責任ヲ負フベ
シ。

五月十二日發

東京 米國公使閣下

京都 陸奧外務大臣

閣下ハ左ノ電報ヲ清國政府へ御電達アラシムコトヲ希望ス。

日本國政府ハ左ノ事ヲ清國政府へ聲明ス。

日本國 皇帝陛下ヨリ、臺灣、澎湖島及其ノ所屬地ノ總督ニ任命サレタル海軍大將子
爵樺山資紀閣下ハ、下ノ關條約第五條末項ニ基キ、日本國全權辦理大臣ノ職務ヲモ執行
スベキ旨併せて命ゼラレタリ。

同總督ハ今ヨリ凡ソ二週間ノ中ニ任地ニ到着スベシ。而シテ到着ノ上ハ其任ゼラレタ
ル特別職務ヲ執行スベシ。

日本政府ハ清國ニ於テモ同總督ニ會商スベキ全權辦理大臣ヲ直チニ任命センコトヲ希
望シ併せて其ノ任命シタル全權辦理大臣ノ官職姓名ヲ日本政府へ通知センコトヲ望ム。

五月十五日午前十一時發

鍋島外務書記官

外務大臣

總理大臣へ

大磯ヨリ申進ジタル通り「サトー」ガ在日本英公使ニ親ル任サ、ハ已ムヲ得ザルコト故、之

機密電報發送

ヲ承認スル外ナシト思フ。右勅許アル様御上奏ヲ乞フ。

五月十五午前十一時發

鍋島外務書記官

外務大臣

總理大臣へ

米國大統領へノ御親書ニ御記名濟ノ上ハ其旨電報アリタシ。

五月十五日午後二時四二分發

鍋島書記官

外務大臣

總理大臣へ

昨今反對黨ノ事情ハ、表面ニハ甚シキ形蹟ナキモ、裏面ニハ種々ノ工風ヲ凝ラシ、如何ニモ

シテ政府ヲ分裂セシメントスルノ「イントリグ」ヲ爲シ居ルニ相違ナク、夫レハ新聞紙上ニ顯ハル、モノヨリモ、尙ホ根深クアルガ如シ。譬へバ閣下ト小生トハ辭職スベシトカ、山縣伯ハ非戦者ノ第一人ナリトカ、樺山ハ無言ナレドモ不平ナリトカ、其甚シキハ閣下ト小生トノ議論相合ハズトカ云フニ至レリ。事些細ナレドモ政府一致シテ間隙ノ乘ズルナキ様注意スルコト肝要ナリ。

各國公使ニハ未ダ面會セザレバ別ニ報道スルコトナシ。

五月十五日午後三時十分發

鍋島書記官

外務大臣

總理大臣へ

唯今「デニソン」ガ「ダン」ニ面會シタル話ト云フヲ聞クニ、在露國米國公使ヨリ米國政府ニ報告シタルニ、露國政府ハ近々ノ内、最モ早く日本ニ向ヒ、朝鮮ヨリ兵隊ヲ撤回スベシト請求シ來ルベキ模様アリトノ事ナリ。是レハ我々ガ考ヘテモ尤モ（プロバビリチー）ノアルコト

機密電報綴込

ト思フ故ニ、此際我レヨリ先ヅ英國政府ニ内々打合せ、朝鮮ハ各國聯合シテ其獨立ヲ維持スルコトトスベシトノ申込ヲ爲シ、今度ハ豫メ英國ヲ味方ニ取り置ケバ、伊太利、亞米利加ハ無論ニ同意スベク、獨逸モ或ハ同盟スベシ。閣下ニ於テ御同意ナレバ、加藤公使ヘノ訓令取調、御意見ヲ伺フベシ。至急回電ヲ乞フ。

昨日申上ゲタル英國新任公使サトノ件ハ、速ニ回答ヲ要ス。御上奏下サレタシ。

五月十五日午後一時天津發 同日午後十時五十分京都着

伊 藤 伯 李 鴻 章

本月十二日發閣下ノ電報ハ、拙者直ニ北京政府ヘ轉送セリ。而シテ之ニ對シ昨日發布セラレタル上諭ヲ北京政府ヨリ拙者ヘ送致セリ。上諭ニ曰ク、

臺灣ニ於ケル兵勇人民等甚ダ騷擾ヲ極メ、實際叛亂ノ状態ヲ爲セリ。巡撫唐ハ原來地方行政ヲ司ル一官吏ニ過ギザルヲ以テ、引渡ヲ行施スル權力ヲ有セザルノミナラズ、同人ハ人民ノ挾制スル所トナリ、因虜ノ如ク、其生命モ絶ヘズ危險ニ逼レリ。而シテ實際

引渡ヲ辯理スルノカナシ。如何ナル方法ニ依リ克ク此難局ヲ鎮壓スベキヤハ、李鴻章ヲシテ詳ニ商量シテ奏明セシムベシト。

拙者ハ上述ノ問題ニ付、閣下ニ協議センコトヲ希望ス。閣下ハ從前ヨリ日清兩國間ニ不幸ニシテ發生セシ困難ヲ鎮壓スル爲メニ、殷厚ノ友情ヲ表シ、拙者ト協同ノ勞ヲ執ラレシコト一回ノミナラズ。而シテ今ヤ兩國間ノ平和交友ハ回復セラレタレバ、本件モ亦兩國ノ友誼ニ由テ結了シ得ラルベキコトヲ疑ハズ。拙者ノ所見ニ據レバ、刻下臺灣ノ事態ハ速ニ兩國全權辦理大臣ノ會議商量ニ附スベキ問題タルヲ信ズ。而シテ閣下ハ已ニ奉天省放棄ニ關シテハ兩國全權ノ會議ヲ要スルモノト認メ居ラル、ナレバ、拙者ハ臺灣奉天ノ二問題ハ同時ニ商量決定セラレンコトヲ勧誘ス。

事態變更ノ場合ニ由リ、我政府ハ拙者ヲシテ上述ノ提議ヲ呈セシムルノ已ムヲ得ザルニ至レリ、拙者ハ閣下ガ此提議ニ對シ成ルベク速ニ同意ヲ表セラレ、且閣下ノ同意ヲ得ル場合ニ於テハ貴國全權辦理大臣樺山海軍大將ノ出發ヲ延引セラレンコトヲ希望シテ已マズ。

明治二十八年五月十七日午後八時發

機密電報綴込

天津 直隸總督李鴻章閣下

伊藤博文

十五日發閣下ノ電信領收ス。

臺灣ニ於ケル地方ノ騷擾ヲ鎮定スル事ハ、同島ノ主裁權下ノ關係約ニ依テ已ニ全然日本ニ讓リ渡シタル今日、兩國政府間ノ協議ニ附スベキモノニ非ズ。

故ニ清國政府ニ於テハ唯行政事務ト、官有物ヲ日本全權辦理大臣ヘ讓リ渡スノ事アル而已。

前記ノ次第ニ付、樺山總督ノ出發ハ猶豫スルコト能ハズ。而シテ同總督ハ已ニ今日京都ヲ出發セリ。奉天半島ニ關スル我政府ノ計畫ハ已ニ前電ニテ申述ベ置ケリ。

電信五月十三日午後四時三〇分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

伊藤總理ニ傳ヘヨ

李鴻章ヨリ貴大臣ニ宛タル昨十五日付ノ電信ハ唯今田通信局長ヨリ其全文ヲ内報シ來リタ

リ。此レニ對シ貴大臣ノ御意見如何ハ未ダ承知セザレドモ、本大臣ハ到底遼東半島ノ事ト臺灣ノコトトヲ一樣ニ見ルベキモノニ非ズト思フ。故ニ臺灣ノ件ニ付テハ此上日清間(コンフエレンス)ヲ開ク必要ナキノミナラズ、之ヲ開クハ頗ル不得策ナリ。依テ貴大臣ヨリ李鴻章ニ臺灣ノ事ハドコ迄モ條約ノ明文ニ遵フノ外手段ナク、樺山ノ出立ハ之レガ爲メ延期スルヲ得ズ。若シ清國政府ガ臺灣ノ内亂ヲ鎮定スル能ハザレバ、日本政府自ラ之ヲ鎮定スルノ責任ヲ有スベシトノ意味ニテ、速ニ御回答アル方然ルベシ。右回答ハ早速「デニソン」ニ起草セシメ御參考ニ供スベシ。

電信五月十六日午後四時三十五分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

左ノ通り伊藤伯ニ傳ヘヨ

臺灣ノ處分ハ速ニ結局スルノ手段ヲ要ス。若シ臺灣ノ管轄ガ日清何レノ政府ニアルヤ明瞭ナラザル内ニ其ノ島内ノ秩序亂レ、居留外國人ノ生命又ハ財産ニ危害ヲ生ズル事アレバ、各國ヨ

機密電報綴込

リ此レガ爲メニ如何ナル干涉ヲ來スヤモ測ラレズ。實ニ危機一髮ノ際ナリ。故ニ本大臣ハ樺山大將ガ一日モ早く出發セラレ度、若シ旅順口ノ軍隊急ニ出發スルコト出來ザレバ、樺山大將ハ先ヅ澎湖島ノ守備兵ヲ率ヒ、臺灣ニ上陸スルコト出來ザルヤ、何レニシテモ樺山大將ガ一日モ早く臺灣ニ赴ク事今日ノ急務ナリ。

井上特命全權公使ヨリ提出ノ朝鮮ニ關スル意見中、公債ノ件ニ付テハ左ノ通閣議決定ノ事。

一、現ニ貸與スル所ノ三百萬圓ノ償還期限ヲ十五年若ハ二十年ニ展延シ、而シテ別ニ大約三百萬圓ヲ惠與シ、之ヲ以テ永久記念ト爲ルベキ事業ヲ起サシムル事。

但シ右金圓惠與ノ件ハ最近ニ開カルベキ議會ニ提出シテ其ノ協賛ヲ求ムル事。

電信五月十六日午後四時四〇分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

左ノ通り伊藤伯ニ傳ヘヨ

西公使ヨリ露國政府ニ照會シタルニ依リ、露國外務大臣ハ陸軍大臣ト相談シ、早速浦潮斯德ノ太守ニ訓令スベシトノ約束アルニ拘ハラズ、唯今ニ橋貿易事務官ヨリノ電信ニ依レバ、同所ノ戒嚴令ハ今日迄依然トシテ取消サル由。之レニハ何か意味ノアル事ナラン。或ハ例ノ朝鮮ノコトニテモ言ヒ出ス準備ニアラザルカ。兎モ角モ斯ル時節ニ於テ、臺灣ノ問題ヲ不極リニ置ク事甚ダ危険ナリ。何卒先刻差出シタル電信ノ意味ニ依リ、樺山大將ノ出發御急ギ被下タシ。

電信五月十六日午後七時〇分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

左ノ通り伊藤伯ニ傳ヘヨ。

閣下ガ李鴻章ヘノ御回答案ハ全然御同意ヲ表ス。コソペレンパラルトアル文字ヲ「フールソベンチイ」ト改メタル方ヨロシト「デニソン」云フ。李鴻章ヘハ直チニ其地ヨリ御發電アリタシ。

機密電報綴込

電信五月十七日午後九時發

京都 鍋島外務書記官 東京 外務大臣

樺山大將ハ愈々イツ出發ニナルヤ。御一報ヲ乞フ。此旨總理大臣ニ傳ヘヨ。

電信五月十八日午前十二時三十五分發

京都 鍋島外務書記官 東京 外務大臣

總理大臣へ

先刻差出シタル加藤へノ訓令ハ、英國政府ニ於テハ果シテ同意ヲ表スルヤ否ヤ確言シ難ケレ
ル、同政府ニ於テハ「デスアグレイブル」ノ一感覺ヲ起ス氣遣ヒナシ。而シテ若シ同政府ノ同
意ヲ得バ、歐洲中之レニ加盟スル國アルコト疑ヒナシ。故ニ右訓令ニ付キ御異存ナケレバ、其

地ノ重ナル内閣員ニ御示シノ上、御裁可ヲ御上奏被下タシ。其上ニテ此地ノ内閣員ニ本大臣ヨ
リ申談スベシ。

電信五月十八日午後五時十分發

京都 鍋島外務書記官 東京 外務大臣

左ノ通り伊藤伯ニ傳ヘヨ。

露國政府ニ向ヒ西公使ヲシテ鐵道等ノ事ヲ（フランク）ヲシテ言ハシムベシトノ御意見ハ
一應御尤モナレドモ、今日マデノ廟議ニ依テ、我政府ガ朝鮮ニ對スル政策ハ、若シ他國政府ヨ
リ苦情ヲ言ヒ立ツレバ、其廉幾等モアルベシ。現ニ鐵道事業ノ如キハ、大島公使時代ヨリ日韓
條約ニ明記スル所ニシテ、無理ニ文字上牽強附解ノ說ヲ立ツレバ、兎モ角モ云ヒ得ベケレド
モ、事實ハ日本ノ手ニテ此事業ヲ爲サントシタルコトハ覆フベカラズ。故ニ本大臣モ西公使ヲ
シテ何トカ露國政府ニ説明セシムル必要アリトハ思ヘドモ、之ヲ爲ス以前ニ將來我ガ政府ガ朝
鮮ニ對スル廟議ヲ確定セザルベカラズ。此事ニ付テハ井上公使ヨリ伺出モアレドモ、未ダ回答

機密電報綴込

スル能ハズ。若シ我廟議確定セザル以前、西公使ヲシテ表面奇麗ナル事ヲ云ハシメバ、其事實井上公使ガ朝鮮ニテ實行シ居ル所大ニ相違スルノ恐レナキ能ハズ。故ニ大臣ハ此事 聖上還幸ノ上、第一番ニ御決議アラシム事ヲ望ミ居ルナリ。

五月十八日午後十時三十五分接

鍋島書記官

外務大臣

總理大臣へ

北京ニ行ク人ハ何時ニテモ出發出來ル用意シ置キテ、聖上還御ノ後拜命スル事ニスベキヤ、又ハ此地ヨリ郵便ニテ其他御發輩迄ニ閣議へ送ルベキヤ。何レガ御都合宜敷ヤ。御一報ヲ乞フ。

加藤公使へノ訓令ハ御熱考被下タシ。但シ其間ニ先ヅ同公使ニ電報シテ、英國政府ガ果シテ我提議ニ同意スベキ見込アルヤ否ヤ、同公使ノ意見ヲ聞合セ置クベシ。

廿八年五月十九日

午前十時二十五分發
午後三時 着

陸奥外務大臣

在京城 井上公使

在露西公使露國外務大臣ト面話ニ關スル貴電領收セリ。

京城ニ於テ我が一舉一動ハ深ク露國ノ感情ヲ動カス事ハ、本使兼々承知シ居レリ。然レドモ政府ノ行爲ハ鐵道、電信、新開港ノ問題ヲシテ願マシカラザル點マデ顯著ナラシメタリ。本使ハ右ノ如キ事アラシメザル様何程注意シタルヤハ貴大臣ノ好ク承知セラル、所ナリ。日本人ノ顧問ハ宮内外務ノ兩衙ヲ除ク外（此ノ兩衙へハ殊更ニ之ヲ避ケタリ）各省ニ入レアリ。又種々ノ事件ニシテ外國ノ嫉妬ニ構ハズ決行シタルモノアリ。而シテ尙ホ夥多ノ事ハ處理ヲ待テ机上ニ在リ。且ツ己ニ報告シタル通り、其ノ中ニハ外國代表者協同シテ抗議スル所トナリシ事モアリ。

然ルニ一方ニ於テハ朝鮮政府一向ニ強キヲ加ヘズ。陰謀ハ始終絶ユルコトナク、今ヤ内閣員中大軌轢中ニシテ、趙陸軍大臣職務失墜ノ爲メ免職云々ノ爭論ニ付キ、朴泳孝ハ陸軍大臣ノ椅

子ヲ自ラ占メント欲シ、同人ノ黨派ハ反對黨ト争ヒ中ナリ。朴泳孝及其ノ他ヨリ過日本件ニ關シ内々國王及妃へ獻白スル所アリタルノ結果トシテ、特別内閣會議ヲ招集セラレ、兩黨會合シタレドモ到底和睦ノ見込ナキニ付、更ニ五月十七日御前會議ヲ開キタルニ國王陛下ハ内閣總理大臣ヲ趙氏免職、反對黨ノ長トシテ大ニ御譴責アラセラレシニ付金總理ハ其ノ職ヲ辭スルノ風說アリ。若シ果シテ然ラバ大藏外務ノ兩大臣モ同ジク辭職スベシ。

目下其ノ黨派ヲ組織中ナル朴泳孝ハ主動者ニシテ、萬事國王王妃ノ寵アルヲ利用シ居レリ。刻下ノ波瀾ハ其儘經過スベキカナレドモ、又候起リ來ルベケレバ、本使ハ如何ナル手段ヲ執ルベキヲ知ラズ。

平和ノ發表セラル、ヤ、日本ハ獨リ事ヲ恣ニスルコト能ハザルベシトハ朝鮮人ノ覺知スル所ナレバ、何レノ黨派ニモ干涉ヲ試ミ、之ヲ責ムル等ノ事ヲ爲セバ必ズ外國公使ノ助ヲ呼ブニ至ルベシ。

兩黨共ニ均シク正義ヲ缺クモノニシテ、只自家ニ權ヲ得ンコトヲノミ之レ努メ居レリ。

右ノ如キ次第ニ付、本使ハ事ノ經過ヲ默視シ居レリ。後難ヲ引受クルノ覺悟ナケレバ此等ノ事ニ干涉ハ到底出來ズ。

敢テ干涉ノ程度、即チ朝鮮政略ノ大綱ヲ決定シ置クコト必要ナリ。而シテ我政府御所見アル

ハ勿論ナレドモ、本使モ亦本使ノ意見アリ。故ニ本使ハ將來ノ我政略ヲ御協議スル爲メ一時賜暇ヲ以テ歸朝スルコト目下ノ緊要ト存ズ。本使尙ホ「リユーマチス」ニテ困難シテ居レリ。速ニ御答ヲ乞フ。

電信 五月二十日 午後四時二十分發

京都 鍋島外務書記官 東京 外務大臣

總理大臣へ

李經方ガ臺灣ニ行クコトハ取敢ヘズ樺山總督迄報知シ置キタリ。就テハ同總督ガ一日モ早ク臺灣ニ行クコト必要ナリト思フ。大本營ヨリ樺山總督へ可成速ニ任地ニ赴クベシト訓令アリテハ如何。

五月二十一日前時二十五分發

機密電報綴込

鍋島外務書記官

外務大臣

總理大臣へ

林拜命ノ上北京へ赴ク爲メ、通常ノ郵便船ニ乗レバ上海ニ行カザルヲ得ズ。此際軍艦ニテ直ニ天津ニ行クコト出來ザルヤ。一應其筋ト御協議被下タシ。

林ガ携帯スベキ國書ハ、陛下ノ御記名ヲ要ス。該國書ハ其地ニ郵送スベキヤ。還幸ヲ待チ此地ニテ御記名ヲ願フベキヤ。其地御發輦ノ期日ヲ承知セザル故、如何トモ取計ヒ兼ヌルニ付、閣下ノ御見込ヲ御申越被下タシ。

五月廿一日 天津發 午後〇時三十五分

於京都 伊藤伯閣下

李 鴻 章

本月十七日付貴電ヲ北京政府ニ轉送シタル結果トシテ、李經方ハフオルモサ引渡ノ事ニ關シ、日本總督ニ會合スル爲メ、委員トシテ臺灣ニ出張スベキ旨勅令ヲ奉ゼリ。同人ハ嘗テフオル

モサニ於テ職務ヲ執リタルコトナク、且本國ニ於テモ未ダ曾テ地方事務ヲ執リタルコトナキガ故ニ、地方事務ニ付テハ經驗ナキ者ナリ。依テ閣下ヨリ樺山總督ニ彼ノ不經驗ナルヲ察セラレ、此度ノ事件ニ付キ友情ヲ以テ助力サル、様御依頼アラシコトヲ懇願ス。己ニ臺灣島ノ主權ハ貴國ニ移リタルニ付テハ、日本ハ臺灣島ノ平和ト秩序ヲ保有セシガ爲ニ、陸海軍ノ兵ヲ送ルコトハ自然ノ事ト察セラル。李經方ハ日本ノ委員ニ會合センガ爲ニ澎湖島又ハ兩全權委員ニ依テ定ムル所ノ地ニ行クベシ。而シテ兩全權委員ノ今後ノ處置ニ關シテハ更ニ全權ヲ委任セララルベシ。臺灣巡撫ハ勅令ニ依テ同島ニ在ル文武官ト共ニ同島ヲ立去ルコトヲ命ゼラレタリ。此ノ次第ハ電信ヲ以テ樺山大將ニ通報アラシコトヲ乞ヒ、併セテ閣下ノ貴答ヲ待ツ。

五月廿二日午後一時十分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

總理大臣へ

林ハ公然拜命ノ後チニ非ザレバ、此レ迄ノ職務上各各國交際官トノ關係ノ引繼ヲ爲ス能ハ

機密電報綴込

ズ。故ニ一日モ早ク拜命ノ御沙汰アラシコトヲ望ム。其上ニテ職務上ノ引繼ハ四五日モアレバ相濟ムベシ。尙ホ確定ノ期日ハ同人拜命直チニ申上グベシ。

五月廿二日 午後五時五〇分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

總理大臣へ

本日閣下ヨリ李鴻章へノ御回電英文電信ニ依レバ、兩國ノ委員ハ全權委任狀ヲ所持スルノ必要アルガ如クニ見ユ。然ルニ此件ニ付テハ本大臣滯京中、閣下ト本大臣トヨリ「デニソン」ニ下問シ、同人ノ意見ヲ採用シ、樺山ニハ全權委任狀ハ附セズ、「ブールオーソリチー」ヲ附與シテ然ルベシトノ議ニ決シ、其手續ヲ履ミ、東京及北京ノ米國公使ヲ經テ清國政府へ樺山ノ任命ヲ通ジタルヲ以テ充分トナシ居リタルガ故ニ、先日清國政府ヨリ北京東京ノ米國公使ノ手ヲ經テ李經方任命ヲ我政府へ報知シ來リタルヲ以テ足レリトシ居レリ。故ニ閣下ガ李鴻章へノ回答中「ブールパウルトアルハ「ブールオーソリチー」ノ意味ナルベケレドモ、「ブールパウルト

ノ一條ニ付テハ最初ヨリ清國ト爭論シタル末ナル故、再ビ誤解ヲ生ゼザル様閣下ヨリ今ニ應李鴻章へ御電報アル方然ルベシト思ヒ、右電報案唯今「デニソン」ニ命ジ起草セシメ、直チニ差上グベシ。但シ本大臣ハ未ダ李鴻章ヨリ閣下へ宛テタル電信ハ見ズ。

廿八年五月二十二日 午前發

天津 直隸總督李鴻章閣下

伊藤博文

二十一日發閣下ノ電信領收ス。右電信ノ要領ヲ樺山大將へ傳へ、且ツ友誼ヲ以テ李經方ト協同事務ヲ執ラレタキ旨申遣シ置ケリ。

日本政府ハ己ニ陸海兩軍ヲ臺灣へ向ハシメタリ。

日本全權辦理大臣ハ全權ヲ與ヘラレ居ルニ付、申ス迄モナケレドモ清國兩全權辦理大臣モ完然ノ全權ヲ有シ來ラレタシ。

而シテ清國全權辦理大臣ハ先ヅ長崎ニ來ラレ、同所ヨリ日本政府ノ船ヲ以テ護送シ臺灣へ向ハル、方危険ナク且ツ便利ナルベシ。

兩大臣ハ何時長崎ニ來リ得ラルヤ御一報ヲ乞フ。

五月二十三日 午後七時十五分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

總理大臣へ

井上公使ニ歸朝ヲ命ズル件ハ大體御同意ナレドモ今日我が政府ノ對韓政略ガ一定セザル内ハ、同公使モ殆ンド歸朝ノ機會ヲ得ザルベシ。而シテ對韓政略ナルモノハ、第三國ノ意嚮如何ニ關セズ、今日迄ノ行掛ヲ貫クモノトセバ格別ナレドモ若シ然ル能ハズトセバ、

列國聯合ノ擔保ヲ申シ出スコトニスルカ、

日清兩國ノ媾和條約ニ依リ、清國ガ朝鮮ノ獨立ヲ確認シタルヲ機會トシテ我ヨリ自ラ退クカノ二策ノ外ナカルベシ。

井上公使トテ右二策ノ外ニ名案アルベカラズ。若シ廟議ニ於テ我ヨリ自ラ退クノ策ヲ執ルトセバ、井上公使ハ夫レ迄滞在シテ同公使ノ歸朝其事ヲ以テ我が討韓政略ニ一面目ヲ開ラクノ機

會トナシ、且ツ成ル丈同公使ヲシテ善後策ヲ施サシメ置クコト最モ得策ナルベク、又同公使今日迄ノ勞力ヲ空シクセザルヘシ。還幸ノ御日取り思ヒノ外遅クナリタルコトハ遺憾ナレドモ、還幸ノ上ハ速ニ廟議ヲ一決シ、而シテ後チ直チニ井上公使ノ進退ヲ取り極メテハ如何。尙ホ御賢考ヲ乞フ。

五月二十三日午前十時一分發

鍋島書記官

外務大臣

總理大臣へ

貴大臣ガ舞子へ御出ノ前、廣島ニ於テ御前會議へ御提出相成リ、閣議決定相成リタル閣議案寫參考ノ爲メ入用ニ付至急御郵送ヲ乞フ。

五月廿三日 午後十二時二十分發

機密電報綴込

鍋島書記官

外務大臣

總理大臣へ

林公使ハ來ル二十七日以後ナレバ何時ニテモ赴任スルコトヲ得ベシ。軍艦ノ用意等其筋へ御協議下サレタシ。

林ノ同行者ハ十五六名ノ筈。

林赴任前 聖上へ拜謁ヲ望メドモ、御還幸ノ期日ニ迫リ、其事出來ザル場合アラン。御還幸ハ愈二十九日ト御確定ニナリヤルヤ如何。

又貴大臣ヨリ李鴻章ニ宛テタル添書ヲ林ニ携帯セシメタシ。右御認メ下サルベキヤ。尤モ御差支ナケレバ、此地ニテ貴大臣ノ名ヲ以テ作リテモヨロシ。

二十一日郵送シタル林ノ 御委任狀御記名ノ上ハ、速ニ御返却下サレタシ。本大臣副書ノ上林ニ渡スベシ。

五月二十三日 午後十二時三九分發

鍋島書記官

外務大臣

總理大臣へ

林公使へノ訓令ハ只今取調べ中ナリ。尤モ其大意ハ通商條約ハ北京ニ於テ會議シ、奉天半島ノ件ハ東京ニ於テ會議スル筈ナレドモ、此ハ同公使赴任ノ後、清國政府ト協議ノ上ナラデハ確定スル能ハザルコトナリ。

五月二十三日 午後八時十分發

廣島 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

總理大臣へ

井上公使ヲ呼ビ返スコトニ付テハ、本大臣ハ尙ホ前説ヲ可トスレドモ、既ニ貴大臣ヨリ御奏上濟ミトノコトナレバ、此際呼返スモ左ノ事情ヲ同公使へ申遣ハシタシ。政府ガ將來ノ對韓放略ヲ定ムルニハ、閣下ノ御意見ヲ親シク聞カンコトヲ望ム。但シ

機密電報綴込

左ノ點ニ付閣下ノ御見込如何。

現今朝鮮内閣ノ騷動中閣下ガ其地ヲ去レバ再ビ手ノ付ケラレヌ様ナル恐レハナキヤ。閣下一度其地ヲ去レバ、他ノ外國使臣ヨリ朝鮮政府ニ離間策ヲ持込ムノ恐レハナキヤ。閣下ガ其地ヲ去レバ露國ヲ始メ關係ノ各國ヲシテ、日本ノ政略ニ變更ヲ來タスベキ疑ヲ起サシメ、隨テ露國ガ干涉シ來ラントスル機會ヲ早ムルノ恐レナキヤ。右等ノコトニ付閣下ニ於テ安心ナリト御見込アレバ、賜暇歸朝ヲ以テ至急御歸朝相成リタシ。此電信ハ總理大臣ト相談ノ上發ス。

右電信ニ御同意ナラバ其地ヨリ本大臣ノ名ヲ以テ直チニ御發電相成リタシ。

五月二十三日 午後九時五五分發

京都 鍋島外務書記官

東京 外務大臣

總理大臣へ

唯今井上公使ヨリ別紙一號及二號ノ電信アリ。御參考ノ爲メ轉電ス。

第一號

朝鮮内閣兩派ノ衝突漸ク切迫ニ付、昨日朴泳孝ヲ招キ齋藤星杉村等同席ニ於テ、ス、ン、コ、ウ、(不明)ト利害ヲ説キ明シ、今一時ニ舊派ノ各大臣ヲ退ケ、不熟練ノ人ニテ強テ之ニ代ハラシムルハ、單リ改革事務ノ進行ニ妨ゲアルノミナラズ、内ハ民望ニ背キ外ハ各國使臣ノ感情ヲ害スベケレバ、甚ダ不得策ナル所以ヲ委シク説得シ、嚴シク彼レノ反省ヲ求メタレモ、同氏ハ新舊諸大臣ハ到底一致協和シテ兩立スベキ見込ナク、隨テ内政改革ノ目的ヲ達スルヲ得ザルニ付、何レカ一派ヲ以テ内閣ヲ組織セザルベカラザル場合ニ迫レリトノ事情ヲ申述ベ、容易ニ本官ノ意見ニ同意スベキ模様ナシ。依テ同氏ニ熟考ノ餘地ヲ與ヘ、本日齋藤星ノ兩人ヲ以テ彼レノ決心ヲ問ハシメントシタル處、本日午前朴泳孝ヨリ淺山ヲシテ「本官ノ忠告ハ了解セザルニ非ザルモ、目下時勢既ニ切迫シタレバ遺憾ナガラ之レニ從フヲ得ズ」ト申越シタリ。就テハ此上忠告ハ無益ニ付、若キ強テ之レヲ差止メントセバ本官國王ニ謁見ヲ遂ゲ、多少強請ヲ用ヒ、朴泳孝ヲ退ゾカシメザルヲ得ズ。然ルトキハ干涉ノ度非常ニ増スコトトナルベシ。就テハ其手段ハ暫ラク見合セ、一時傍觀シテ朴氏等ノ自爲ニ任セ、他日溶解ノ餘地ヲ存置クベキヤ。何レニシテモ目下露西亞ノ關係モアリ取捨ニ迷ヒ居ルニ付、一應我が政府ノ御意見至急承知致シタシ。

第二號

機密電報綴込

先刻ノ電文中「此際傍觀シ他日溶解ノ地ヲ存スル手段」トハ國王並ニ内閣員等ハ、曾テ本官ヲ顧問親シ百事相談スルトノ依頼有之ニ付、朴泳孝ヘハ顧問ノ廉ヲ以テ内外ノ事情ニ付テノ忠告ヲ容レザル故、暫ラク傍觀シ是非ヲ云ハズ。此事情ハ我が政府ヘ報告シ、我が政府ノ意見トシテ他日申出ルコトアルベシトノ趣意ヲ以テ書翰ヲ與ヘ、返事ヲ取り付ケ置クベシ。又國王ヘハ内謁見ヲ明日求メ、同趣意ヲ以テ唯顧問トシテ穩當ノ忠告ヲナシ、我が政府ノ意見ハ訓令ヲ待チ他日進奏致スベシトノ意ナリ。

五月二十三日 午後十時〇分發

鍋島外務書記官

東京外務大臣

總理大臣へ

林ハ廿八日ニ非ザレバ此地ヲ出發スル能ハズ。故ニ御還幸前ニ其地ニテ拜謁スルコト六ヶシカルベシ。和泉艦ハ何時頃神戸ヲ出帆スルノ準備ナルヤ。其模様ニ依リ遺憾ナガラ林ハ陛下ニ拜謁セズシテ出發スルコトニナルヤモ知レズ。

林へノ御親任狀ハ廿七日ノ朝迄ニ是非當地ニ届ク様ニ願フ。

五月廿四日 前十一時發

鍋

島

林公使

總理大臣へ

本使ハ日本ノ委員トシテ外國公使館委員ト引キ合ヒノ事務ヲ片付ルニハ、廿七日中在京ヲ必要ト致ス。且ツ出立前

陛下ニ拜謁ノ榮ヲ得ルコト、清國政府ニ對シテ都合宜シキノミナラズ、是非閣下ニ親シク面謁訓示ヲ仰ギ置キ度ニ付、御還幸後迄滯京致シ居ルコト相叶間敷哉。

五月廿五日 午後一時五五分發

京都 鍋島外務書記官

東京外務大臣

機密電報綴込

總理大臣へ

先刻差出シタル英文電信ニ對シ、勅裁ヲ得ル運ニ至レバ、井上公使ノ歸朝ハ右手續濟ミ迄見合セテハ如何。

五月二十六日 午後六時三五分發

同 七時一分着

鍋島外務書記官

東京外務大臣

總理大臣へ

獨逸公使申出ニ關シ、佛公使へ内内尋ネタルニ、同公使へハ未ダ電訓ナケレドモ、右ハ遼東半島還付ニ關スル條件ニシテ、特ニ軍隊ヲ留メ置ク年限等ノコトナルベシト云ヘリ。

電信譯文 五月二十六日 午後五時五〇分發
同 六時五〇分着

鍋島外務書記官

陸奧外務大臣

總理大臣

在香港中川領事ヨリ左ノ通り電報アリ。

「チャイナ・メール」新聞ハ五月二十四日午後六時四十五分發臺北ヨリ左ノ報ヲ得タリ。

巡撫「唐チンソン」ハ臺灣共和國大統領トシテ同島ノ獨立ヲ布告セリ而シテ外國ハ公然之ヲ認ム。

五月廿六日 午後十時發電

天津 直隸總督李鴻章閣下

伊藤博文

本日發閣下ノ電報ヲ接受ス。樺山海軍大將ハ明早朝淡水ニ到着スベキ豫定ナリ。余ハ熟考ノ上目下ノ情勢ニ於テ兩國委員ノ成ルベク速ニ會同スルコトノ尤モ緊要ナルヲ認ム。清國委員ノ直ニ臺灣ニ赴カンコトヲ望ム。余既ニ電報ニテ閣下ニ照會シタルガ如ク、樺山大將ハ必要ナル

機密電報綴込

場合ニ於テハ何等ノ助力ヲモ與フルコトヲ用意シ居レバ、決シテ清國委員ヲ不都合ナル地位ニ置クノ虞ヲ抱クヲ要セザルナリ。

五月廿六日 正午天津午後八時三十分着

伊藤 伯

李鴻 章

閣下ガ廿四日附ノ電信ヲ以テ御親切ニ御申越ノ御高案ノ趣ヲ深謝ス。李經方ハ目下上海ニ於テ出發ノ準備ヲ爲シツ、アリ。樺山子ハ何時何處ヨリ日本ヲ發シ、且凡ソ何日頃淡水ニ着スベキヤ御電報ヲ賜ハリタシ。臺灣島民ガ目下擾亂シテ收拾スベカラザルノ有様ナルコトハ明カナリ。其鎮定ニ至ルハ若手日子ヲ要スベシ。李經方ハ軍人ニモアラズ、又地方官ニモアラザルガ故ニ、樺山大將ト會同シテ打合セヲ爲スハ、同大將ガ右ノ擾亂ヲ全ク鎮定スルノ後ヲ待タザルベカラズ。淡水ハ上海ヲ距ルコト汽船ヲ以テシテ二日ヲ費ヤスニ過ギザルガ故ニ、鎮定ノ上ハ通知次第淡水ニ向フコト容易ナリ。而シテ右ノ通知其他委細ノ事ハ、樺山大將ヨリ直接ニ在上海李經方ニ申送ラレテ可ナリ。李經方ニ於テ鎮定ノ未ダ終ラザルニ先ダチテ淡水ニ入ルハ、貴

賤ノ人民ヲ激動セシムルノ虞アルヲ以テ、甚ダ困難ナルベシ。是ヲ以テ拙者ガ閣下ニ望ム所ハ、閣下ガ此等ノ事情ヲ察セラレテ適當ノ處置ヲ執ラル、ニアリ。

五月廿六日 午後九時半着

總理 大臣

外務 大臣

朝鮮問題ハ御還幸ノ後テ御決定可相成旨御來電之趣承知セリ。本大臣ハ決シテ東京各大臣ノ決議ヲ主張スルニ非ズ。然レドモ此事ニ關シ將來ノ廟議ハ大概如何ナル方針ニ決スベキヤヲ豫メ心得居ルコト必要ナリ。明日ニモ各國公使等ニ面會シ、此件ノ話シアリタルトキ、抗辯ノ都合アル故ニ、本日御前會議ノ模様及ビ貴大臣ノ御意見丈ニテモ御洩シ置キ被下候事出來ザルヤ。

日清事件(終)

秘書類纂 第壹卷

日清事件 人名索引

(1)

伊藤博文

三、三三、三七、四九、五九、六〇、
六三、六四、六五、六六、八九、九〇、九一、
九二、九四、一〇四、一〇六、一〇七、一〇九、一一〇、
一一六、一一七、一二三、一二四、一二五、一二六、
一二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、
一三四、一三五、一三七、一四一、一四三、一四六、一四七、
一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五九、一七一、
一七三、一八〇、一八二、一八八、一九四、一九六、一九七、
一九八、一九九、二〇〇、二六七、二六八、二七〇、二七三、
二七四、二七五、二七七、二七八、二七九、二八一、二八二、
二八三、二八六、二八七、二九〇、二九一、二九三、二九四、
三〇三、三〇四、三〇六、三〇九、三三〇、三三四、三五九、
三六七、三七七、三四四、三八七、三九一、三九四、四〇九、
四二二、四三六、四三七、四四五、四五二、四六八、四八三、
四九三、四九五、四九六、五一二、五二三、五三五、五九二、
五九八、五九九、六〇四、六四四、六四五、六六六、六七七、

索

引

伊東巳代治

六三、六五、一二三、一四三、一八八、三三三、
三九一、三九二、三九三、三九四、三九六、三九九、
三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、
三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、
三四四、三四六、三四七、三四八、三四九、三五一、
三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、
三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、
三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七二、三七三、
三七四、三七五、三七六、三七七、三七九、三八〇、
三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、
三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、
三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、
四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、五三三、五三八、五四七、
五五三、七七八、八八一、八二四、八二五、八二六、八二七、
六二八、六三三、六三三、六五三、六五六、六五七、六六二、
六六三、六六三、六六九、七三三、七三〇、七四四、七四五、
七五二、七五六、七五七、七五九、七六〇、七六七、七七七、
七八〇、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、八二〇、
八三三、八四五、八六三、七三三、八三六、八四〇、八四七、
八五二、八五四、八五五、八五六、八五八、八五九、八六〇、
八六一、八六二、八六三、八六四、八六七、八六八、八六九、
八七〇、八七一、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、
八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、

伊東 祐亨 八三、八五、八六、八七、八五、

石黒 忠憲 八二、七三〇、七三三、七四四、

石坂 九一、三七四、

井上 馨 九一、五六六、

井上勝之助 四八三、八六〇、八六三、八六四、八六五、八七三、

石原 鍋藏 二二、一四三、一九九、

伊集院彦吉 四〇六、

イスマル・パシヤ 四二二、

井上 良馨 五七〇、

キインジツシ・グレッツツ 三三八、

岩倉 具視 五七四、五七五、五七六、五七七、

(ロ)

ローズベリー 七二七、

盧 永 銘 四三、四九七、五〇一、七〇四、六二一、六三三、

一五五、三五五、三六六、三七七、三八八、三八八、

ロ バノ フ 三九七、

ロスチャイルド 一七〇、

朴 泳 孝

八六五、八六六、八七七、八七八、

ベズルト 四八九、

ベルチー 五二八、

(ト)

トレンチ 三五、

徳瑾琳 (リットリ) 五九、六〇、

豊臣 秀吉 一六一、

ドンネリー 三三六、三三七、三三八、三三九、

陶 大 均 三三六、三三七、三三八、三三九、

唐チンソン 六四〇、六四五、六九四、六九五、

(チ)

張 蔭 桓 八八一、

一〇四、一〇八、一一〇、一一一、一一三、一一三、

一一五、一一三、一一三、一一四、一一五、一二六、一二七、

一二八、二二九、一三〇、一三一、一三四、一五五、一五六、

一三七、一三八、一四三、一四六、一四七、一四八、一四九、

一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五六、一五七、

一九七、

ハート 四三五、

ハンスマン 四九〇、

ハンネツケン 七三六、

莫 鎮 藩 七四〇、

西 徳次郎 四三、九八、一六八、一七〇、一七四、一七七、

一八二、四四三、四五五、四五五、五三二、五三七、五四五、

五四六、五四七、五四四、六〇一、六三四、七四七、七四八、

七五五、七五七、七六〇、七七〇、七九五、七八六、七九九、

七九一、七九二、七九六、七九九、八〇一、八〇二、八四四、

八一九、八二二、八三三、八三五、八三九、八四三、八六〇、

八六三、八六四、八六五、

西源四郎 三八八、四〇六、七七七、七八八、

二橋 八〇七、八六〇、

(ホ) 四八六、

ホーヘンロー 四八六、

ホツチンゲル 五九六、

ホーウイー (エル) 七三二、七三四、七三五、七七七、七三九、七四一、

星 八七七、

ロベルト・ハート

四九一、

(ハ)

ハートレット 四三、

橋本 綱常 八七、八九、

董 一五七、一五八、二〇一、四三五、四三六、四七七、

四九三、四九五、五二四、五九五、六〇〇、六〇一、六一三、

六二二、六二五、六二六、六二七、六二九、六三〇、六三五、

六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、

六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、

六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五九、

六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六八、

六六九、六七〇、六七二、六七三、六七四、六七五、

六七六、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、

六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、

六九一、六九二、六九三、七四五、七四六、七四七、七五四、

七五五、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、

七六五、七六九、七七〇、七七三、七七八、七八〇、七八八、

七九一、七九三、七九五、七九七、八〇〇、八〇二、八〇三、

八〇四、八〇七、八〇八、八二二、八二六、八二八、八三三、

八三八、八三九、八四五、八四八、八六六、八六九、八七四、

八七五、八七八、八七九、

高平小五郎

四〇、七〇、七五、九七、五八、五八八、
五九三、七五三、七六六、七八三、七六四、七六六、
七八八、七九〇、七九六、八〇三、

熾仁親王

八三、

田村怡與造

八五、八六、八九、九〇、九四、

龍居頼三

三三九、三四五、三六一、三七三、三八八、四〇六、

多田好問

五三三、三五七、五四六、五六二、

タツフエー

五七四、五七五、

ダン

八五、

(レ)

聯芳

三二八、三四三、三六三、三七八、三九九、
三三〇、三三六、三四三、三四五、三四七、三四九、三五九、
三六一、三六九、三七三、三八二、三八三、三八九、三九〇、
三九一、三九七、三八八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇三、
四〇四、四〇五、四〇六、八三三、八三四、
七〇九、七二〇、七二一、

レンホルム

(ソ)

曾紀澤

一五七、

孫航政

六一、

曾禰荒助

七九九、八〇一、八〇五、八〇七、八二〇、八三三、
八三三、八三五、八四四、

(ネ)

ネツリン

五九九、

(ナ)

中村

八四、九三、九三、九四、

中田敬義

一三三、一四三、

中島雄

一五七、

鍋島桂次郎

一五九、一七三、一八七、一八七、七七七、七六六、
六七七、七八八、七八九、八五三、八五四、八五八、八五九、
八六〇、八六二、八六三、八六四、八六七、八六八、八六九、
八七〇、八七三、八七三、八七四、八七五、八七六、八七八、
八七九、八八〇、八八一、

榎原陳政

三三九、三四五、三五七、三六一、三六四、三六五、
三六八、三七三、三八八、四〇六、

中牟田倉之助

七〇五、

中川

七四四、八五〇、八八一、

中野

七七七、

(ラ)

羅庚齡

一一三、一四二、一五五、

羅豐祿

二六、二七、四三六、六四〇、六六五、

ラウサー

四〇八、八四五、

(ム)

陸奥宗光

二、一三、一八、二三、二四、三三、
三五、三七、三九、四〇、四一、四三、四四、
四五、四六、七五、九四、一〇〇、一〇四、一〇六、
一〇九、一六、一一三、一二四、二七、二九、一三〇、
一三三、一三三、一三四、一三六、一四一、一四一、一四六、
一四八、一五一、一五四、一四八、一五九、一七〇、
一七三、一七四、一七七、一八〇、一八一、一八七、
一八八、一九八、二〇一、二六八、二七九、二八七、三〇五、
三〇七、三二一、三三三、三四四、三四六、三六七、三七七、
四〇八、四三三、四四二、四三六、四三九、四五二、四五七、
四九二、五〇四、五二二、五八一、五三三、五四五、五七九、
五九四、五九八、六〇四、六三三、七四五、七四六、七四七、
七四八、七四九、七五〇、七五三、七五四、七五五、七五六、
七五七、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六五、七六七、
七六八、七六八、七六九、七七〇、七七三、七七五、七七七、
七七八、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、
七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、

陸奥廣吉

一一三、一四二、

村田淳

三九八、四〇六、八二六、

内田康哉

四三、四二一、五三三、六四〇、六六五、

(ウ)

ウエルセルス・ハイナムプ

五七五、

ウキルキンソン

七三九、

(ノ)

野津道貫

七、八四、八七、二八三、七七七、

野間口兼雄

四〇六、

(ク)

栗野慎一郎 四、四六、七〇、七五、九九、三〇七、
 四二、七六、七九〇、七九四、八〇二、八〇六、
 四九、
 楠本正隆 三〇三、四三四、五三四、五三一、五三七、五四六、
 五六一、八二三、八四六、
 黒田清隆 五六一、八二三、八四六、
 グランド 五五九、
 楠内 七三三、
 クルース(ヘンリー) 七四、七三、
 黒岡帯刀 七三九、
 グレシヤム 七三三、

(ヤ)

山縣有朋 七、八〇、八一、八四、八七、八八、
 八九、九一、九三、一〇〇、八五五、
 山縣文藏 四〇六、八二六、
 山本 五五八、

(マ)

マクマホン 一六一、

マルタン 七六、

(ケ)

慶郡王 二六、

(フ)

ブラン 七〇、七、七三、七四、五七七、
 フオスター 三八、
 ブラント 四八三、四八四、五八〇、五八七、六六七、七〇九、
 フォールド 七〇、七二、七三、
 フォリス 五二六、
 福原 五九八、
 ブリユニチユリー 七三、
 ブラッセル 七六、
 ファッテル 七六、
 フランク 八六三、

(コ)

小村壽太郎 三、四、一六、一七、三、三五、三六、

兒玉源太郎 八五、
 伍廷芳 一三三、一三三、一四四、一五五、一六六、一七七、
 一三三、一四四、一四四、一四七、一四九、一五〇、
 一五五、一五五、一六七、一八八、三三四、三五、三六、
 三七、三八、三九、三〇、三二、三三、三三、
 三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、
 四一、四二、四三、四四、四五、四六、
 四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、
 五四、五五、五七、五八、五九、六〇、六一、
 六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、
 六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、
 七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、
 八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、
 九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、
 九七、九八、九九、一〇〇、四〇一、四〇三、四〇四、
 四〇五、四〇六、四七、五〇、五二、五三、六一三、
 六一四、六一五、六一六、六四三、六六四、八三三、八三四、

(エ)

易廷棋 一五、
 榎本武揚 二〇〇、
 エドレル・フォン・ブルメンフェルド 五七五、
 エドワルド、リットネル 五七五、
 榮祿満 五九七、

(テ)

デットリング(徳瑾琳) 五九、六〇、六三、六五、
 四一三、
 デンビー 一五〇、一五一、一九七、三九、三五三、三五四、
 三五六、三六四、三六六、三六四、三九五、四〇九、八一三、
 八四七、
 デニソン 一八〇、七六八、八五五、八五九、八六、八七〇、
 八七一、
 鄭永昌 三八八、四〇六、六四〇、六六五、
 デフォレスト 七三、

顧肇新 一五五、
 黃承乙 一五五、
 吳太徵 三〇〇、
 國府寺新作 四三、
 ゴロウニン 五七二、

索引

田健次郎 七五九、八五八、
丁如昌 七四〇

(ア)

青木周藏

三九、四五、四一、四五三、四九三、五〇〇、
五一、五七九、五九〇、五九四、五九六、五九七、六〇八、
六一、六三三、七四九、七五〇、七五三、七五五、七五七、
七七九、七九〇、八〇一、八〇五、八〇九、八二二、八二七、
八三〇、八三三、八三三、八三六、八三五、八四五、八四九、
一六、
二六、
一〇〇、二八七、二八九、七四〇、

愛親覺羅
青木宣純

彰仁親王 二六二、
荒川巳之次 一〇〇、二八七、二八九、七四〇、
アレキサンダー大王 四三六、四三七、四三八、五九六、六二〇、
八七、
八七、

浅山

(サ)

西郷従道

八七、一〇〇、一九四、一九八、一九九、二〇〇、
四七七、七〇五、
佐藤進 一九五、三七四、

佐藤顯進 三九、四三、三一、三七三、三八八、四〇六、
西園寺公望 四三五、四三七、四三八、四七九、四九三、
四九五、四九六、五〇一、五〇四、五〇三、五〇八、五〇七、
五六一、五七四、五七六、六〇一、六〇六、六〇七、六二〇、
六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三九、六三〇、
六三一、六三三、六三四、六三七、六五八、六五九、六六〇、
六九四、

サリスベリー

四七三、
佐久間佐間太 六五七、六五八、
サーゲン(ビー) 七四一、七四四、

佐藤愛磨

七四五、七四六、七四七、七五四、七五六、七五七、
七五八、七五九、七六〇、七六七、

齋藤修一郎

八七、
サト 八五六、

(キ)

恭親王

六四、一八、一七三、四九四、六二、
ギル 一六八、一七〇、
キンバレー 四六九、七〇四、
キールマンズエツグ 五七四、五七五、
八六六、

金

友漉(邵?)

(ユ)

メツケル 四八五、五八〇、

(メ)

水野遵

(シ)

白根專一 九一、九三、九四、
邵友漉 一〇四、一〇八、二〇〇、二二、二二、二二、
一五、一三三、二九、一三、一六、一六、二九、
一四、一四八、一五四、一五六、一九七、
一五、

徐汝濟 一五、
招條銘 一五、
徐鴻聲 一五、
施祥之 一五、
施之 一五、
シシキン 一六、一七〇、

索引

シタリ 一六九、一七〇、
シーボルト 四八六、八〇九、
柴田家門 五二、五七、五四六、五六二、
徐用儀 六二、
ジューン(サー・フランシス) 七〇八、
ジヨナサンゴープル 七七、七三、
シャーマン 七三、

(ヒ)

土方久元 九四、

平井希昌 七三、

ビユーロー 四七、

ビスマーク 四八一、四八七、

ビーコンスフヒールド 五七、

ヒトロヴオ 六三六、

ビルム 七四六、

(モ)

モーゼル 七三六、

索引

本野 一郎 六八

錢 紹 植 七三

(ス) 周布 公平 三

瑞 三、一四、一五

スクリッパ 二五

スタンレー 七六

杉村 澹 八七

昭和八年七月二十五日印刷
昭和八年七月三十日發行

複製 不許

校訂者 兼 塚 篤
東京市麴町區内山下町東洋ビル三階

印刷者 島 潔
東京市小石川區久堅町百八番地

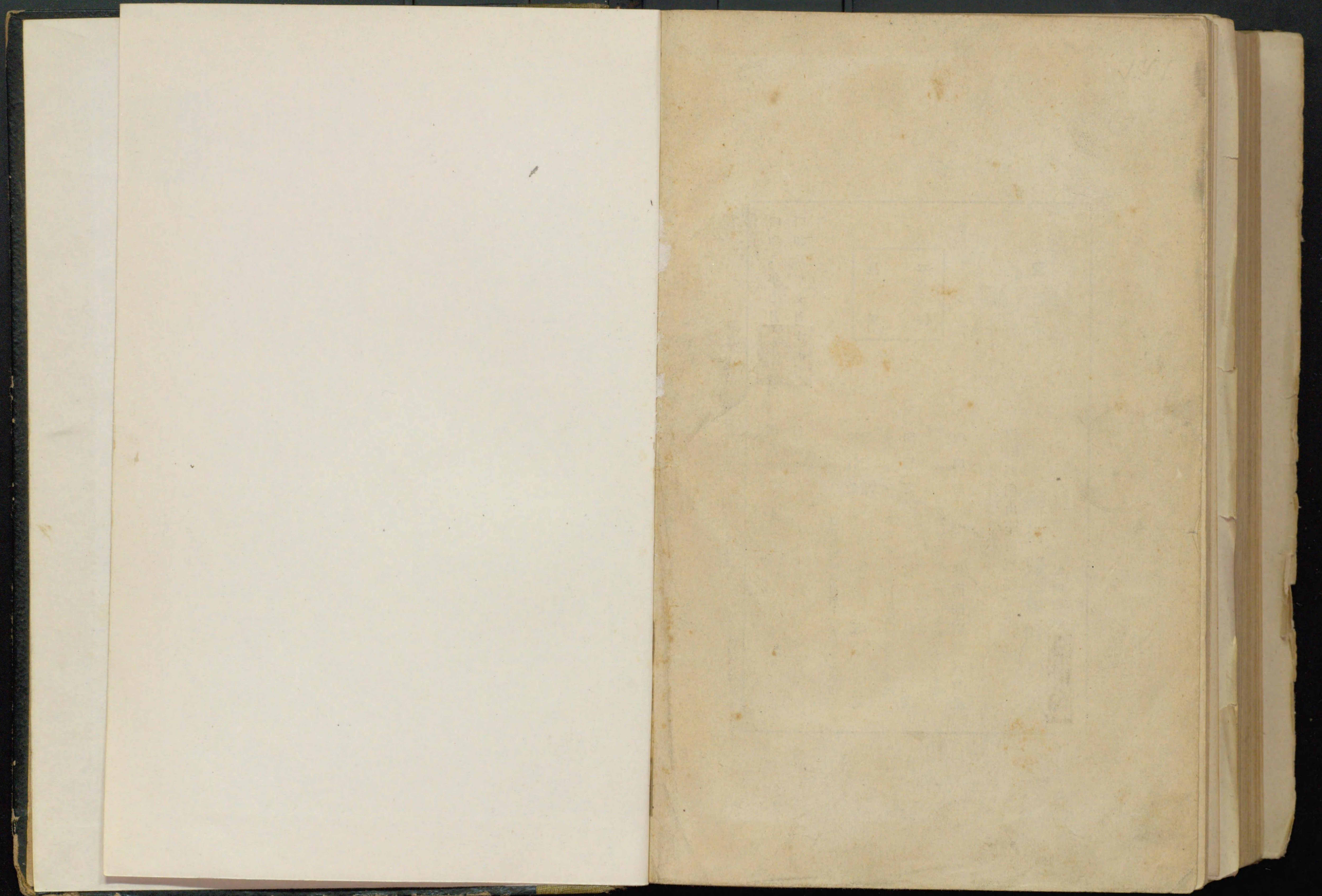
印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

麴町區内山下町東洋ビル三階

秘書類纂刊行會

電話銀座 二四一三番

發行所



649
10

